

令和5年度  
**研究紀要**  
(第19集)

～ 異文化交流エッセイ集 ～

『世界とつながり、心豊かに生きる子どもの育成』



山口県国際教育研究会

## はじめに

今年もまた研究紀要（第19集）を通して私どもの活動を紹介することができ、会員一同喜びを感じています。教職に携わる私たちが、本来の業務に加えこうした活動を行う理由として、自己研鑽と恩返しの意識があります。本会の大きな活動の1つとして夏の研究大会があります。4部構成の終日のプログラムで構成されるこの研究大会は、学校関係者だけでなく国際理解教育に興味をもつ一般の方々や学生のみなさんにとっても、学びが多く参加して楽しい内容になっているものと自負しています。それぞれのプログラムを担当するスタッフも、趣向をこらし準備を重ね質の高いものを提供しようと努力することで自らの研鑽となっています。同時に、多くが世界各地の日本人学校に派遣された教員である会員は、赴任先で吸収した多くのことを少しでも山口県に、住んでいる地域に、あるいは勤務している学校に還元できればと考えています。異国の地で体験することは驚きと発見の連続で、それを教育現場に活かしたいという思いもありますが、それ以上に強いのは、恩返しの気持ちです。派遣教員の多くは家族で赴任します。不慣れな土地での生活は戸惑いばかりです。派遣された学校の教職員も面倒を見てくれますが、それ以上にお世話になるのはその土地の方々です。買い物で困っているときに声をかけてくれる店員さん。幼子を連れ行く先も分からずに戸惑っているときに、子どもをあやしてくれた若者。些細なことですが、その一声、その笑顔に救われたことは数知れません。その地で受けた恩を、その方々に返すことはできませんが、何からの形でお返ししたい。そんな思いをもって活動しているのは私だけではないと思います。そう考えると、今年度、山口県が日本人学校の派遣教員を募集しなかったことは誠に残念でなりません。来年は是非、募集が再開されることを祈るのみです。

本誌は会員がこれまで築いてきた実践や本会の今年度の足跡を形にしたものです。手に取られた方には、本会の活動や本誌の内容を近くの誰かと話題にいただければ幸いです。また、本会の活動をいつも支えていただいています山口県教育委員会様、山口市ならびに山口市教育委員会様、山口県国際交流協会様、JICA 様など各団体の皆様に改めてお礼申し上げます。

山口県国際教育研究会  
会長 藤井 智寛  
(山口市立湯田小学校 校長)

# 目 次

◇ はじめに	山口市立湯田小学校	校長 藤井 智寛	…	1
◇ 目 次			…	2

## I 異文化交流エッセイ集

### ジャカルタ日本人学校に赴任して…

平成 11 年度派遣	インドネシア	ジャカルタ日本人学校		
		山口市立湯田小学校	教頭 徳光 哲生	… 4

### 「未来への架け橋」の思いを込めて「つながり」を意識した実践

平成 15 年度派遣	中華人民共和国	上海日本人学校		
		周南市立桜木小学校	校長 歌田 聡	… 6

### となりのクラスはオーストラリア！

平成 15 年度派遣	オーストラリア	シドニー日本人学校		
		山口市立二保小学校	教頭 中倉 宗利	… 10

### ロンドン日本人学校の取組について

平成 15 年度派遣	イギリス	ロンドン日本人学校		
		周南市立須磨小学校	校長 古元 充成	… 13

### マラウイの子どもたち

平成 17 年度派遣	アラブ首長国連邦	アブダビ日本人学校		
		周防大島町立東和小学校	教頭 山本 直	… 16

### バンコク日本人学校への派遣を振り返って

平成 18 年度派遣	タイ国	バンコク日本人学校		
		光市立塩田小学校	教頭 内山 裕史	… 20

### こんなところにスリランカ！

平成 19 年度派遣	スリランカ	コロombo日本人学校		
		山口市立宮野小学校	教頭 井上 秀雄	… 28

### スペイン・マドリードでの生活を振り返って

平成 23 年度派遣	スペイン	マドリード日本人学校		
		山口市立小郡中学校	非常勤講師 安岡 義郎	… 30

### 赴任後、1年間経って思うこと

令和 2 年度派遣	中華人民共和国	蘇州日本人学校		
		下関市立安岡小学校	教諭 櫻井 紀邦	… 39

### 「食」をとおした地域づくり～ドイツ「Tafel」～

令和 3 年度派遣	ドイツ	デュッセルドルフ日本人学校		
		周南市立夜市小学校	教諭 藤本 浩行	… 40

## II 外国語教育・国際教育の実践

### 現地理解教育で学んだことを授業づくりに生かす

令和3年度派遣	ドイツ	デュッセルドルフ日本人学校					
		周南市立夜市小学校	教諭	藤本	浩行	…	45

### 国際教室における課題と実践

平成8年度派遣	オーストラリア	パース日本人学校					
		山口市立平川小学校	教諭	辻本	紳一朗	…	50

## III 帰国報告会・総会 第29回山口県国際教育研究大会

役員会・帰国報告会・総会	…	57
--------------	---	----

第30回山口県国際教育研究大会	…	59
-----------------	---	----

### 「楽しく学べる国際教育のワークショップ」

	JICA 中国	山口デスク		小川	真奈		
平成17年度派遣	アラブ首長国連邦	アブダビ日本人学校					
		周防大島町立東和小学校	教頭	山本	直	…	63

# I 異文化交流エッセイ集



## ジャカルタ日本人学校に赴任して…

山口市立湯田小学校 教頭 徳光 哲生

(平成 11 年度派遣 インドネシア ジャカルタ日本人学校)

### 1. 遠く、新しい記憶

平成 11 年度、「即派遣組」としてインドネシアのジャカルタ日本人学校に赴任して 3 年間で過ごした。帰国して早 20 年以上が経つ。

赴任時のことを思い返せば…、赴任する年の 1 月、「ジャカルタ日本人学校」に 4 月から赴任するかどうか、校長から意思確認を求められたと記憶している。不勉強ながら、そのときは、まだ、「ジャカルタ」がどこにあるのか、インドネシアがどのような国なのかさえ知らず、すぐに地図で確認したことを覚えている。今では、社会が大きく「グローバル化」し、インターネットや SNS などが飛躍的に発達し、Google マップや Google アースで世界中を「見る」ことができるが、当時の自分はまだそのような環境にはなかったのである。

同じ年の 4 月からの赴任に向け、筑波で研修したり、家族とともに予防接種に明け暮れたり、船便発送の荷物準備に追われたりしたのをおぼろげながら覚えている。当時 3 歳半の息子と 1 歳を迎えたばかりの娘、そして妻とともに渡航。大きな期待と少しばかりの不安の中、赴任した初めての国「インドネシア」。

今、思い返せば、この 3 年間の海外生活は、自分の「国際感覚」を磨くかけがえのない日々だったように感じる。3 年間で出会ったたくさんの日本人、インドネシアの人々、今でも時折思い出す古いようで新鮮な記憶の数々である。

### 2. 現地での生活・現地での記憶

赴任してからの 3 年間。

自分自身は、日本人学校での学習指導等の日々。自分の赴任時代には、北は北海道から南は鹿児島までの教員が日本人学校に在籍していた。これらの先生方との教育実践も大いに勉強になった。

妻や子供たちは、「お手伝いさん」とのコミュニケーションに奮闘し、また、楽しみながら日々を過ごしていた。インドネシアでは、他の多くの東南アジアの国々に派遣されている日本人がそうであるように運転手(インドネシア語で「ソピル」)、お手伝いさん(インドネシア語で「ブンバントウ」)を雇っての生活であった。この経験も、異文化理解や異国理解には大きく役立つ経験であった。また、息子と娘はあえて日本人学校の幼稚園には入れず、現地の幼稚園に通わせた(現地の幼稚園とはいえ、上流層の子息が通う英語・インドネシア語両方を使う幼稚園ではあったが)。この経験も息子と娘にとって幼



伝統的衣装と当時住んでいたアパートメント

いときに経験した「国際感覚」として今の残っているように思われる。また、妻は、いまだに私たちが暮らしている山口市に留学してくるインドネシア家族のサポートを率先して行うなど、楽しみを感じながら当時身に付けた語学力や経験を生かしている。

### 3. 貴重な体験を生かして…

海外での貴重な経験をさせていただいた3年間、本当に多くのことを肌で感じる事ができた日々であったと思う。そこから学んだこと、そしてこれからに生かしていきたいこと、そんなことをこの項では綴ってみたい。

自分が経験し財産になっているもの、それは、異文化の中でたくさんの人と触れあい、その国での暮らしを生で感じる事ができたことだろう

と思う。インドネシアは言わずと知れた「イスラム教」の国である。しかし、皆がイスラム教というわけではない。国民の多くはイスラム教であるが、そのほかにも、中華系の人には仏教徒であり、また、多くのキリスト教信者の人もいる。バリ島などに住む人々は、そのほとんどがヒンズー教徒である。多民族・多宗教の人々が、おのおのを尊重し、暮らしている国であると認識している（自分と共に生活した運転手さんはイスラム教徒、お手伝いさんはキリスト教徒であった）。また、貧富の差が日常にあふれる世界でもあった。一部の富豪やお金持ちの人々、そして着のみ着のままでも明るく幸福感を感じながら生活している人々。みな、とてもフレンドリーで、自分の知らない世界をたくさん見せてくれた人々である。大金持ちの人と知り合い、その生活ぶりに感嘆したり、裸足で、あばら屋のような家で楽しそうに生活する家族のもとを訪ねて、幸せな生き方って何なのだろうと考えさせられたり。そんな人たちが住む世界に身を置いていた経験は、なにがしかの世界観を自分に与えてくれたのではないだろうか。また、そのような中で暮らすことで自分が「日本人」であることへの誇りを感じるとともに、日本を正しく説明することの責任感なども感じていた。他人のアイデンティティを尊重すること、自分のアイデンティティをしっかりとつこと、これらの大切さを感じたのである。

これからの子どもたちが生きていく時代は「グローバル化」がますます進み、多くの外国人と出会い、共に生活する時代であろう。そのような社会を生きていく子どもを育てる立場の自分たちは、真の国際理解や国際教育とはどのようなものを意識していくべきであろうと思う。そのために、世界中で私と同じような経験をした教員が、自分たちが感じた国際感覚や人権感覚をもとに教育活動を行うことはとても有意義であろうと思う。

自分の経験を今一度思い返し、異文化理解や国際教育などについて考えさせられた。改めて日本人学校赴任という貴重な体験をさせていただいたことに感謝したい。



小学部3年1組の子どもたちと（2001年）

## 「未来への架け橋」の思いを込めて「つながり」を意識した実践

周南市立桜木小学校 校長 歌田 聡

(平成 15 年度派遣 中華人民共和国 上海日本人学校)

### 1. はじめに

平成 15 年 1 月中旬、在外教育施設（上海日本人学校）への即派遣（平成 15 年 4 月派遣）を打診された。当時は 1 年間研修を受けて、在外教育施設への派遣となるケースが多い中、突然の話に驚きを隠せなかった。また、その頃の世界情勢は、新型肺炎（SARS）が北京、香港など中国各地や台湾、シンガポールなどで大流行し、世界保健機構（WHO）は各地域への渡航延期勧告を出した。幸い、5 月に入って感染症は減少し、6 月に事実上の終息宣言が出されたが、プライベートでは第 3 子が派遣前 3 月末に誕生するという状況で、即派遣の依頼には少々悩んだが、折角いただいた機会であることから即派遣の決断をした。

派遣期間中の日中関係情勢は決して芳しい状態ではなく、そうした国際情勢を含め、中国の歴史・文化を学び、肌で感じ、学校教育活動はもとより私生活でもかけがえのない宝物を得ることができた。約 20 年前のことではあるが、こうした貴重な 3 年間の足跡を振り返り、帰国後にどのように生かしてきたか、また、今後の学校経営及び学校教育活動等に生かしていきたいかを考えてみた。

### 2. 当時の上海日本人学校

S J S（上海日本人学校の略）は、中国の経済発展に伴い、日本の企業進出が著しく S J S の児童生徒数は赴任当時、約 1,200 名であり、校舎の増築に伴い、中学部 1 年はプレハブ校舎、1 年後には中学部は新校舎（小学部隣接）に移った。しかし、さらに 1 年後は 2,000 名を超え、当時校舎のあった虹橋校（小学部・中学部併設）とは別に、私が帰国した平成 18 年 4 月から浦東校（一部小学部・中学部併設）が開校し、虹橋校は小学部だけとなった。

赴任した平成 15 年度は、「いつもにこにこ一生懸命」を学校スローガンに、小学部各学年 8～9 クラス、中学部各学年 3～4 クラスの大規模校であった。

### 3. 「つながり」を意識した実践

#### (1) 小中学校併設の環境を生かした取組

##### ①算数の授業をとおして

私は中学校数学科教員で、小学部との併設という環境を生かして、小学部に何度か算数を教えに行ったり、中学部の生徒が小学部低学年に算数を教えたりする機会を設けた。自分としては、9 年間を見通した算数・数学科の系統的な学びを研修することができた。また、生徒たちは算数を教えることで小学部との交流だけでなく、どのような教え方をすればよいかを考え、準備し、実行し、その後振り返ることで自分た



算数の様子の「学級便り」



ちの力を見つめ直すことにつながった。生徒たちからは「教えることがこんなに難しいとは思わなかった」などという感想があった。

### 小学部2年の算数の先生になろう！

～小学部の2年生に算数を教えに行きました～  
小学部と中学部の算数・数学合同授業を20日（月）に行いました。

昨年度から少しずつ考えはじめていましたこの企画！もし、中学部3年生を担当したら、ぜひ実現してみたいと・・・。小学部2年の先生方のご理解とご協力を得て、一昨日、「日本人学校ならでは」の授業を開催することができました。くしくも、3年2組は日程的に1番になりました。ドキドキワクワクしながら・・・の授業。私は、課題提示、準備・計画段階でアドバイスをする程度で、実際は生徒達が考え、判断して授業を行いました。

小学部2年7組、8組、9組の児童に「3つの数の足し算を教えること」と「くふうした計算方法（結合法則）に気づかせること」そしてできれば結合法則や交換法則を使いこなせるようにすることが課題でした。

加法の結合法則  $(a+b)+c=a+(b+c)$   
加法の交換法則  $a+b+c=a+c+b$  など

上記のことは、すでに中1で学習済みですが、これを気づかせる授業ってどうすればいいの？ということ、準備・計画時間は選択数学1時間+αと限られています。その中で、2人、3人組でアイデアを出し合っていました。

「先生、こんな教え方で、2年生わかってくれるかな？」

「2年生が興味を持っているもの何ですか？」

「計算ができたなら、ご褒美にカードをあげよう」

家で準備してきた班、模範授業をした上で本番を迎える念の入りの班もありました。その一生懸命さに担当としても、この夢の授業を企画してよかったなあ～と思いました。

小学部2年の児童の皆さんも一生懸命、授業に取り組んでいて、感心させられました。



#### 2組の生徒達が考えたアイデアの数々

- ・ブロックを使って説明した。
- ・最後に「がんばった」人にあげようということで手作りメダルを準備した。
- ・数え棒と数字カードを使って説明した。
- ・シールカードをつかって、できたら貼ってあげられるようにした。
- ・お金を使って、現実的な学習を！
- ・3つの数の足し算を並べかえながら、どの計算が一番速くできるか、考えてもらった（気づいてもらった）
- ・お金を使って、十の位と一の位で分けて計算の仕方を説明した。
- ・巨大タイルを使って説明した。
- ・トランプを使って、10のかたまりをつくるゲームをした。
- ・小黒板が威力を発揮した。
- ・身近な消しゴムと鉛筆で説明した。
- ・食べ物のイラストを描いて、興味を引いた。



△さあお兄ちゃん・お姉ちゃん先生の説明、わかるかなあ？

中学生が小学生に算数を教える様子の「学級便り」

#### ②小中合同大運動会の実践

2,000名を超える小中合同の大運動会の開催は、今なお鮮明に覚えている。上海市内の陸上競技場を借りて、学年の徒競走では2カ所で同時にスタート、演技の入退場の時間を削って、ある学年の演技が終われば、違うスペースで別の学年の演技が始まるという流れであった。その分、教員から保護者には、徒競走の順番や走路位置、演技種目では誰がどの位置で演技するかなど、事前に保護者への情報提供に細心の注意を払った。紅白に分かれ、1,000名規模の応援合戦は、ものすごい迫力であった。それを中学部のリーダーが仕切って練習等を行ったので、リーダーの生徒にとっては、かけがえのない経験となったに違いない。

## (2) 上海日本人学校の生徒のニーズに寄り添う

### ①部活動への憧れ

中学部の生徒たちは、日本の中学校や高等学校に対する部活動の憧れがかなり強かった。S J Sでは、安全面等の配慮から登下校は決められたスクールバスあるいは保護者の送迎で、中学部の下校時刻は15時～15時40分だったため、部活動は全くなかった。好きなスポーツや芸術・文化を「思いっきりやってみたい!」という中学部生徒の思いを汲み取り、2年目からクラブ活動として週に1回ではあるが実施した。このクラブ活動の種目は、生徒のアンケートをもとに決め、小学部の先生方にもサポートに入ってもらい、できるだけ生徒の思いを実現できるようにした。私は、水泳部と基礎体力作り部を担当し、週に1時間ではあるが思いっきり身体を動かさせ、スポーツの楽しさを味わわせた。

### ②高校進学に向けて

S J Sの約8割の生徒は、日本の高校を受験する。すなわち、高校受験を機に日本に帰国する家庭が多い。3年間のほとんどを中国で生活しており、高校生活をはじめ日本での生活に不安を抱く生徒が多かったため、日本の生活について、生徒たちと話をする機会を多くもった。

## 4. 夢の希望を抱かせる教育活動

### (1) 著名人との関わり

#### ①元読売巨人軍監督 原辰徳氏の講演

平成17年6月、S J Sに原辰徳氏を迎えて、講演会を開いた。小中学生は原選手の現役時代の活躍を知らないが、保護者の方々にはたいへん好評であった。私は、その講演会で司会を務めさせていただき、とても貴重な経験となった。

原氏から夢を抱き、その夢の実現に向けて突き進んでほしいという意味にちなんで、「夢進(むしん)」という言葉プレゼントしていただいた。



原辰徳氏 直筆の色紙

#### ②アテネオリンピック女子マラソン金メダリスト 野口みずき選手との交流会

野口選手とは、実際に児童生徒と身体を動かしたり、走ったりするなど一緒に汗を流した。また、走り方の基本やストレッチの重要性、体幹を鍛えることなどの話をされた。最後に、金メダルを見せてもらい、児童生徒から「すごい!」という歓声が上がったことを覚えている。

#### ③ミュンヘンオリンピック男子100m平泳ぎ金メダリスト 田口信教氏の講演

1972年、ミュンヘンオリンピックの金メダリストである田口氏は、とにかく「努力の大切さ」を唱えられた。結果を出すには、人より数段練習し、それをどのくらい続けられるかにかかっていると力強く話された。講演をしていただいた時期が秋であり、受験を控えた中学部3年生にとってはとても刺激のある内容であった。

### (2) 4泊5日の修学旅行

平成17年6月7日～6月11日の4泊5日、中学部3年生94名と修学旅行を実

施した。

虹橋→西安→敦煌をめぐり、中国の歴史と文化を学び、自然にふれあい、日本とのつながりについても考え、まさに五感をととしての経験となった。

引率教員としては、中国国内はパスポートが必要であり、学級生徒分のパスポート 30 数名分を肌身離さず持って、5日間を過ごすというハラハラドキドキの修学旅行であった。9年後、同窓会に招待されたが、やはり修学旅行の思い出話で盛り上がった。



## 5. 帰国後、3年間の経験を生かして

### (1) 数学科教員として

小・中学校9年間を系統的に考え、教材研究・授業改善を図ることができた。また、帰国後出前授業として近隣の小学校で授業を行い、小中連携強化に努めることができた。

### (2) 生徒会活動・学級経営・部活運営

S J Sの運動会運営を中学生がリーダーとして活躍した経験を生かし、生徒会活動、学級経営、部活運営など常に生徒主体、あるいは生徒にとってどのような方法で形にしていくとよいかという視点で考えるようになった。

この考えは管理職になった今でも私の学校経営の根幹となっている。

## 6. おわりに

平成 15 年から3年間、上海日本人学校でたいへん貴重な経験をさせてもらった。今、こうして思い起こしてもかけがえのない時間であったとしみじみ感じる。今回は日本人学校での様子を中心に執筆させていただいたが、今後、もし機会があれば当時の中国での生活の様子も提供できたらと思っている。

約 20 年前のことが、昨日のことにように思い出される理由は、記録の蓄積と同期教員との出逢いである。記録の蓄積は、3年間の学級便りを保存していたこと、毎日日記を綴っていたことである。同期教員とは、毎年(コロナ禍を除き)年末に持ち回り幹事を立て、同期会を開いて一杯酌み交わしている。その時間、あの3年間のことが走馬燈のように思い出されるのである。

「一期一会」を大切に、今後の教員人生を充実させていく所存である。

となりのクラスはオーストラリア！

山口市立仁保小学校 教頭 中倉 宗利

(平成 15 年度派遣 オーストラリア シドニー日本人学校)

## 1. はじめに

シドニーに派遣を伝えられたのが平成 14 年の冬だったと記憶しています。その後、2 月につくばで 15 年度に派遣される全教員と一緒に 1 週間ほど研修を行いました。シドニーに派遣される他の教員もそこで初めて顔を合わせます。私を含めて 4 人でした。インターネットで、シドニー日本人学校の受け入れ担当の先生と連絡を取りながら、勤務のことはもちろん、生活の仕方や様子などいろいろと聞くことができ、不安もかなりありましたが、少しずつ準備を進めることができました。



広大な敷地にある立派な校舎とグラウンド

## 2. シドニー日本人学校の特徴

(1) 国際学級が併設されている世界で唯一の日本人学校(当時)として、オーストラリアの小学生と日本人が学ぶ学校で、教室が隣同士になっているのが特徴でした。国際学級は現地の教員を雇っていて現地の教育課程で教えていますが、音楽、図工、体育はミックスレッスンといって合同で授業をしていました。職員室も一緒です。運動会やスクールコンサートなども合同でやっていました。現在のウェブページを見ると以前とは様子がずいぶん変わっているようですが、運動会やスクールコンサートなど今も続いているものもあるようです。



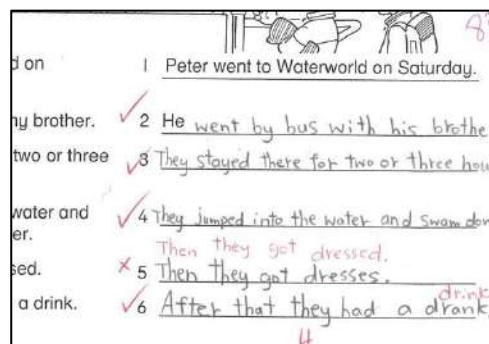
図工のミックスレッスン

(2) 日本人の子どもも、オーストラリアの子どももお互いの言語はもちろん、サーフィン、クリケットなどオーストラリアならではのもの、習字、剣道、茶道など日本ならではのものもそれぞれ学習できるので、お互いの文化からたくさんことを学びます。卒業式や始業式などそれぞれの式では、「君が代」と「Advance Australia Fair」をそれぞれ歌い、国旗も両方掲げられます。日本人学校とはいえ、オーストラリアで暮らしていることが身に染みて感じられました。



式では両国旗が掲げられ、両国歌が歌われる

- (3) シドニーは日本と比べ、気候、生活のきまりや習慣がずいぶん異なります。
- ・モーニングリセスといって中間休みにおやつを食べる習慣があり、日本の子どもたちはおにぎりなど食べていました。
  - ・日本の学校では集会などで、みんなが集まったりして座るときは、いわゆる「体育座り」をしますがシドニーでは、男子も女子もあぐらをかいて座る現地の子どもが多かったです。初めは違和感を覚えました。
  - ・学校では必ず教員が子どもを見守り、子どもたちだけで過ごすことはいけないことになっています。そのため、朝や昼休みは教員が順番で見守る約束になっています。
  - ・日差しが強く、紫外線から身を守るため、屋外ではフラップ帽という首の後ろに日よけのついた帽子を必ず被る約束になっています。派遣教員も屋外ではサングラスが欠かせません。
- (4) 英語に特化した教育が特徴で、EFL と言って毎日 1 時間、現地教員による英語の授業があります。おかげで子どもたちの英語力はかなりのもので、小学 2 年生で英検準 1 級を取得したいという相談があってびっくりしました。テストやプリントで、正解の○が✓で丸付けをされるのがオーストラリアだそうで、初めて見た時、「あっているのになぜ？」という感じでした。



### 3. 派遣教員としての経験

#### (1) 南半球ならではの学び

苦労したのは南半球のため、理科の先生は天体を教えるのに苦労されていました。太陽や月は東から昇って北を通って西に沈む、上弦の月は、日本では右側が光っているが、シドニーでは左が光っている、さそり座やオリオン座はひっくり返っているなど・・・また、社会の気温の変化の学習ではシドニーの気温が紹介されていて、これもひっくり返っていました。実際の様子と教科書とは違いながらも、日本に帰る子どもたちがほとんどなので教科書を教えることが大切であると考えました。

#### (2) 経営としての学校

ご存知の通り、日本人学校は私立なので、授業料等から学校を経営しなければなりません。膨大な敷地やたくさんの施設があるシドニー日本人学校も児童生徒数の減少により、経営の立て直しを余儀なくされ、魅力ある学校づくりとして、バイリンガル、国際教育に力を入れて児童生徒数の確保のための様々な動きが始まりました。自家用車に、学校の広告のステッカーを張るようなことも管理職は行っていました。

#### (3) 現地でのコミュニケーション

勤務で必要な英語の文書の翻訳や日頃の現地教員とのやり取りなど、通訳がいるわけではないので生活も含めてかなり高い英語力が必要になります。英語なら中学生から勉強してきたので少しはわかるだろう、と高をくくっても特有のなまりや早い口調でなかなか聞き取れません。特に電話は、相手のジェスチャーすらわからないので、やりとりに相当苦労しました。社会見学で行く水族館の予約を自分で電話をしなければ

✓が正解のしるし

ならず、無事に行けてほっとしたことがありました。さらに、職員会や全体の打ち合わせは英語なので、自分が提案などするときは、事前に英文を考えてから伝えることの繰り返しでした。英語が話せたらどんなに楽だろうと、何度思ったことでしょう。

#### 4. まとめ

派遣教員は全国から集まるので、通勤が電車、学校に駐車場はない、卒業式などは紅白の垂れ幕を掲げる、など山口県ではあまりきいたことがなく、地方によってずいぶん環境が違うのも興味深かったです。英語が通じず、仕事もハードで苦勞しましたが、やがて日本に帰国する子どもたちが日本でも活躍できるよう、よりよい学習指導や学級経営を考えることに一生懸命だったことを覚えています。帰国してからは、社会科の国際社会の学習でシドニーでの経験を子どもたちに伝えることができました。

3年間の派遣教員としての勤務は、とても貴重な経験でした。家族と現地で暮らすことや観光で各地を訪れたことも、普通ではまず経験できないよい思い出になりました。派遣時は受け入れ担当の方に家や車のお世話をしていただき、帰国する時には、たくさん先生方が見送ってくださり、無事に素晴らしい3年間を過ごせたことに感謝しています。いつかまたシドニーを訪れて、当時の記憶をたどってみたいと思っています。



メルボルンで見つけた野生のコアラ

## ロンドン日本人学校の取組について

周南市立須磨小学校 校長 古元 充成  
(平成 15 年度派遣 イギリス ロンドン日本人学校)

### 1. はじめに

私がロンドン日本人学校に赴任したのは、2003 年である。ロンドン日本人学校では、テムズ学級（特別支援学級）と中学部の技術科を担当した。特別支援教育が充実した学校で、障害の有無にかかわらず児童・生徒がお互いを認め・助け合い、それをすべての教職員で見守り・支える学校であったのを今でもよく覚えている。そんな学校でテムズ学級を担当できたことは、本当に幸運であった。保護者、教職員にも助けていただき、校内外での様々な取組を実践することができた。また、現地校との交流など日本の学校ではできない貴重な経験もたくさんさせていただいた。

そんなロンドン日本人学校について、帰国後にまとめていたものを寄稿させていただくことになった。簡単ではあるが、当時のロンドン日本人学校の取組について伝えることができたと思う。

### 2. ロンドン日本人学校について

ロンドン日本人学校は 1976 年に設立され、2005 年 4 月現在、小学部 332 名、中学部 127 名、計 459 人で欧米地区大規模校の一つであった。1999 年には、特別支援学級であるテムズ学級が開設された。（現在は設置されていない）校舎は、1900 年に現地の女学校として建てられたものであり、総レンガ造りで重厚なたたずまいである。校庭には校歌にもうたわれている大きな菩提樹があり、ロンドン日本人学校を象徴するものの一つとなっている。



ロンドン日本人学校の  
校舎、校庭



### 3. 英会話の学習について

小学 1 年生から中学 3 年生までの全学年で、週 3 時間の英会話授業を設定していた。英語の学習経験や習熟状況に応じてクラスを編成し、ネイティブの教師と日本人教師が連携しながら効果的な指導を行っていた。英語圏はもとより全世界の人とかかわりをもてるようにと、国際コミュニケーション能力を育成することにも重点を置いていた。



英会話の授業風景



#### 4. 現地校交流について

海外で暮らす子ども達ではあるが、日常生活の中で英国に住む日本人以外の人とかかわりをもつ機会はそれほど多くなかった。そこでロンドン日本人学校では、学部・学年別に現地の学校やフランス人学校、ドイツ人学校、スペイン人学校などと相互訪問を行って交流を深めていた。交流では、それぞれの学校の授業に参加したり、自分達の国の文化や日頃の学習成果などを発表し合ったりしていた。交流を通して子ども達は、英語を介して異国の人々とコミュニケーションすることの楽しさを感じることができていた。また、それが英語を学習する意欲や異文化を知ったり理解しようとしたりする態度につながっていた。



福祉についての授業での交流の様子



手作りのプレゼントを交換する子ども達

#### 5. 特別支援教育について

ロンドン日本人学校では、個別の教育的ニーズに応じた教育に全校体制で取り組んでいた。テムズ学級（特別支援学級）では、国語・算数などの基礎・基本的な学習内容の定着を図ること、体験的な活動を重視し、生活力の向上を図ることを目標として指導を行っていた。テムズ学級に在籍する子ども達は、個々の教育的ニーズに応じて交流学級でも学習していた。また、通常学級に在籍する児童・生徒に対しても、その教育的ニーズに応じて個別またはTTによる指導を行っていた。特別支援教育担当の教員だけでなく様々な教員が連携して特別支援にかかわることで理解や協力の輪が広がり、学習や行事における支援を学校全体の共通理解のもとに行うことができていた。



英国人教師との  
かわりを楽しむ授業



自然体験学習  
(交流学年の友達と一緒に)



英国人コーチにテニスを  
教えてもらう授業



自分達で作った製品を  
販売する子ども達





近所の店で買い物をする授業



販売機で地下鉄の切符を購入する子ども

## 6. 私立学校としての取組

ロンドン日本人学校は、学費をいただいて学校を運営している私立学校であるため、学校経営という側面から子どもの数を確保しなければならない。英国の公立校では外国人であっても無料で教育を受けられたり、ロンドンにはインターナショナルスクールもあつたりするため、その中からロンドン日本人学校を選んでもらうために、学校の魅力を進んでアピールしていかなければならなかった。(たくさんの人に知ってもらうために広告を出すこともあった)

日本語による文部科学省の定めた学習指導要領に準拠した教育を受けられることが一番のセールスポイントであるが、それ以外にも英語教育、現地校交流、漢検・英検の実施などロンドン日本人学校独自の特色を加味していかなければならなかった。2005年には、学力向上という視点から学力テストを導入し、その結果を各教科部会で分析・検討して教科指導に生かすようになった。結果は保護者にも開示し、理解を得ながら指導を進められるようにした。また、学校評価を保護者にしてもらい、それを次年度の計画にも反映させるようにしていた。このように私立学校として子どもや保護者のニーズを把握し、教育的な検討、判断を行いながら運営に反映させる姿勢は、帰国後も大いに役立った。

## 7. おわりに

ロンドン在任中に生まれた娘が現在大学に通っている。帰国してから随分と時間が経ったが、ロンドン日本人学校でのたくさんの思い出は、今もあせることなく心に残っている。当時のテムズ学級の児童とは今も年賀状のやり取りをしている。彼らが就職して仕事をがんばっていたり、グループホームでの生活を楽しんだりしていることを知るたびに、ロンドン日本人学校での生活を思い出し、うれしい気持ちになる。

ロンドンでは、いくつも貴重な出会いがあった。その中でも一緒に着任し、同じ飛行機で帰国した10人の同期は、どんなときも励まし合い助け合ったかけがえのない存在である。全国から集まった仲間と切磋琢磨できることも、日本人学校の大きな魅力だと思う。今振り返っても、輝き充実していたと思える3年間を過ごす機会を与えていただいたことに、改めて感謝したい。

今、日本人が海外で働き、子どもを育て学ばせることは以前よりも困難になっているのではないかと。そんな時期だからこそ、覚悟をもった教師が日本人学校に赴任し、子ども達のために実践を重ねる必要があるのではないかと。

興味のある方は、ぜひチャレンジしてください。

## マラウイの子どもたち

周防大島町立東和小学校 教頭 山本 直

(平成 17 年度派遣 アラブ首長国連邦 アブダビ日本人学校)

### 1. はじめに

「アフリカに行ってみたい」「あの大地に立ってみたい」

子どもの頃からの夢の一つであった。

山口県国際教育研究会でお世話になっているうちに、JICA 中国さんが実施している「教師海外研修」について教えていただいた。ぜひ行きたい！という気持ちで応募したところ、中国地区の仲間 8 人と一緒に参加させていただくことになった。

### 2. マラウイの第一印象

関西空港、香港、ヨハネスブルグ（南アフリカ共和国）と乗り継いで、マラウイの首都リロングウェイに到着した。乗り継ぎを含めて約 26 時間。あこがれのアフリカの大地に足を踏み入れた。首都なので人も多い。車も多い。とても活気ある空気を感じた。



リロングウェイの様子



バス乗り場の様子

### 3. マラウイについて

マラウイについて、たくさんの情報をいただいた。一部を紹介する。

- ✳ 一人当たりの GDP 299 ドル (2008 年)  
(アフリカで 47 位)  
(日本は 39,731 ドル 世界第 17 位)
- ✳ 平均寿命 39 歳～40 歳
- ✳ HIV/AIDS 感染率 11%

マラウイの 2 大課題は「医療」「教育」ということが現地の話の中で何度も出てきた。それらを解決する一つの手段として「青年海外協力隊」の退院の活動があることも知った。

「医療」については、次のような課題があると説明があった。とにかく驚きの連続の日々だった。



病院の様子

- ✳ 深刻な医療設備不足、薬品不足
- ✳ 公立の病院は無料
- ✳ 「マラリア」は、要注意！



看護師さん



蚊帳は必需品

「教育」については、次のような課題があると説明があった。こちらも現地で目の当たりにして、驚きの連続であったと同時に、マラウイの人々の力強さを感じる毎日だった。

- ✳ 小学校は無償教育（義務ではない）
- ✳ 小学校卒業率は60%
- ✳ とにかく学歴社会



地方の保育園



小学校の教室

今回の大切なミッションの一つに「マラウイの学校で授業をする」というのがあった。実際に授業をすると、とにかく一生懸命話を聞いてくれること、そして私たちにとっても親切にしてもらえることがとても嬉しかった。たまたま「8月6日」が授業の日だったため「平和学習」を授業に取り入れた。マラウイの先生方は「ヒロシマ」「原爆」ということは認識していた。子どもたちも一生懸命取り組んでくれた。



授業後の縄跳び



見送りに元気いっぱい！

#### 4. 帰国してからの実践

帰国してから「マラウィ学習」に取り組んだ。その中のいくつかを紹介する。

##### 【マラウィの食べ物を作ってみよう】

マラウィの主食である「シマ」（トウモロコシの粉で作ったもの）を実際に作った。「食」は、外国を身近に感じる一つの方法であると思う。マラウィで作り方を教えてもらった「シマ」は児童にも好評だった。児童の感想の一部を紹介する。

##### ✧ 児童の感想

- ・指で食べるのがつらかったです。
- ・シマは「もち」のにおいがしました。肉とすごく相性がよかったです。



シマ作りに挑戦



手で食べてみました

##### 【マラウィの人に日本の食べ物を紹介しよう】

JICA 山口さんの協力もいただき、実際に山口県周辺に住んでいる「マラウィ」の人に学校に来ていただいた。児童は「日本のおむすびを紹介したい」と話し合いで決めて、一緒におむすび作りを行った。また、マラウィについての話を聞いたり、問をしたりした。児童は、あっという間に打ち解けて、とても和やかな時間になった。

ホンモノに出会うということは大切なことだとあらためて感じた。児童の感想の一部を紹介する。

✦ 児童の感想

- ・フローレンスさんがラップで包んでくれたのがうれしかったです。
- ・ライスボールホットやってみますか？と教えてあげました。
- ・チムウェムウェさんとマラウィで会いたいです。



おむすびと一緒に作る



笑顔で握手

5. おわりに

2010年の「教師海外研修」から、10年以上時間が過ぎているが、今でも「マラウィ」というワードを聞くとすぐに反応してしまう。「マラウィ」は治安もよく、独立して一度も内戦がない国である。青年海外協力隊の隊員が世界で一番多い国と教えていただいた。

今後も「マラウィ」に注目していきたい。そして「マラウィの子どもたち」の笑顔がもっと増えるように、できることに挑戦していきしていきたい。



## バンコク日本人学校への派遣を振り返って

光市立塩田小学校 教頭 内山 裕史

(平成 18 年度派遣 タイ国 バンコク日本人学校)

### 1. タイ国のこと

#### (1) 国名、首都、公用語、宗教など

##### ○国名など

- ・タイ王国 (タイおうこく) 通称タイ (ประเทศไทย Prathet Thai)
- ・タイランドと称されるものも多い。漢字で泰(タイ)と表記されることもある。
- ・公式の英語表記は、*The Kingdom of Thailand*、略して *Thailand* (タイランド)

##### ○首都、通貨、人口など

- ・首都はバンコク都 東南アジア諸国連合 (ASEAN) 加盟国
- ・通貨はバーツ
- ・人口 6,891 万人 (2017 年、タイ国勢調査による)

##### ○公用語 タイ語

##### ○民族

- ・タイ族 75% 華人 14% その他マレー系 インド系 モン族 カレン族
- ※タイ北部には、「少数民族」もいる。

##### ○宗教

- ・仏教 (南方上座部仏教) 95% イスラム教 4% キリスト教、他にヒンドゥー教 シーク教 道教など
- ・王室を始め、タイ国内のほとんどは仏教徒で占められている。現在もタイ仏暦 (仏滅紀元、タイ暦) が主に使用されている。上座部仏教徒の男子は一生に 1 回は出家するものとされている。
- ・南部三県のマレー系住民のほぼ全てがイスラム教徒である。

#### (2) 地理と気候

タイ王国は、インドシナ半島のほぼ中央に位置している。メナム川 (チャオプラヤ川) が南北に流れ、流域は広大な沖積平野を形成している。西と北にミャンマー、北東にラオス、東にカンボジア、南にマレーシアと国境を接している。

国土面積は、約 51 万 4,000 km<sup>2</sup> で、日本のおよそ 1.4 倍の広さがある。そのうち 40% を農地が占めている。

気候は、全体としては熱帯モンスーン気候で、半島部は熱帯雨林気候となっている。1 年を通して大変暑い。年平均気温は 28℃。モンスーンの影響を受け、季節は「暑季」「雨季」「乾季」の 3 つの季節がある。4 月は「暑季」と言われ、一番暑く、真夏である。5 月から 10 月は湿気が多く「雨季」と言われる。雨が多い季節であるが、日本の梅雨とは異なり、毎日 1 時間程度の激しいスコールがある。11 月から 3 月はほとんど雨が降らず「乾季」と言われる。12 月くらいがとても涼しく過ごしやすい。朝晩は、半袖では肌寒く感じる。

赴任した直後は「暑季」。そのあとは湿度も高く蒸し暑い「雨季」。日中の気温が、40℃ 近くの中で新しい生活。日差しも強い。暑さに慣れることに精一杯。さらには、室内は冷房が効きすぎていて、温度差にも体が慣れず、半年が経つぐらいまでは、体調を保つことに神経を使ったことを記憶している。

一緒に赴任した教員の中には、数日前まで日中の気温が 0℃ から 3℃ くらいの場所で生活していたが、いきなり 40℃ の中での新生活がスタートした教員もいた。

「雨季」の猛烈なスコールは、町の至る所で一時的な洪水を引き起こした。道路も 30 cm 以上水につき、いつもの渋滞がさらにひどくなることもあった。

### (3) 日本とのつながり

タイ国に在留する日本人は、5万人とも6万人とも言われている。

約7千社の日本企業が進出していることや、年間約100万人が観光でタイへ行くこと、タイで製造した日本車を逆輸入していることや日本の工場向けの部品をタイから輸入していることなど、日本とタイは関係が深い。

駐在員とその家族の方を中心に、多くの日本人が生活するタイ国には、日本人が生活するには困らない環境が整っている。

先にも触れたが、タイ国は、アジアのデトロイトともいわれ、トヨタ自動車を中心に大手自動車会社が生産拠点をおいている国である。それに伴う部品メーカーも数多く進出している。

トヨタ自動車の工場を見学する機会があったが、数か所ある工場とその規模、見学を受け入れる態勢に驚いたことを覚えている。

### (4) 社会情勢

社会情勢については、比較的安定していると捉えることができる。何をもって平穏と捉えるかは様々であるが、ニュースや報道で入ってくる情報に比べると、一般の人々の日常は落ち着いている。クーデターが起き、臨時休業や自宅待機となったが大きなことにはならなかった。

## 2. バンコク日本人学校について …平成20年度学校要覧をもとに記述

### (1) 学校名

- 泰日協会学校（バンコク日本人学校）  
（英語）THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL  
（タイ語）โรงเรียนสมาคมไทย-ญี่ปุ่น

### (2) ステータス、設置機関等

- タイ国私立学校（日本国文部科学省海外教育施設認定校）
- 設置機関 泰日協会（会長：Staporn Kavitanon）
- 運営責任者 泰日協会学校理事会  
（理事長） 羽島 俊秀（泰日協会代表）  
（マネージャー） パースク・プラカスカン（タイ側代表）  
（校長） 網田 俊二（日本国文部科学省代表）  
※理事長、マネージャー、校長については、平成20年度

### (3) 泰日協会学校の歴史的経過とその運営

バンコク日本人学校は『盤谷日本尋常小学校』として1926年（大正15年）に設立された。日本人学校の中で最も長い歴史を誇る学校である。

昭和20年の第二次世界大戦の終戦をもって閉鎖され、その後現地法人の熱意により、1956年（昭和31年）に日本大使館の中に「大使館附属日本語講習会」という名称で設立された。その時は幼稚園児も含めてわずかに28名、教職員は4名、岡崎熊雄領事が初代校長に就任した。

しかし、日本やタイ国の経済発展に伴い日系企業の進出に合わせて児童生徒の増加が続き、1972年（昭和47年）には在籍数が500名を超え、また当時の日華敗訴運動とも重なって日本人学校の治外法権的な存在が問題になり、正規の学校設立が急務となった。在タイ日本国大使館は、タイ国日本人会を設置者として許可を得ようとしたが、外国人法人は学校設置をすることはできなかった。

戦後復活していた日タイの友好・親善・協力団体である「泰日協会」（1935年設立）

が母体機関となって申請し、1974年（昭和49年）にタイ国私立学校法第20条1項の適用により、タイ国政府から正式に義務教育学校として認可を得ることができた。

よって、学校名が「泰日協会学校」となった。

学校の設置については、大使館を始め関係者の大変なご努力で、「日本語による日本国内に準ずる教育を・・・」という在留邦人の願いがタイ国行政機関に聞き入れられた。「母国語による教育を認める」という数少ない「特定学校」としてのご厚情をタイ政府からいただいている。

児童生徒増に伴って校地を移転するなど幾多の課題を乗り越えながら、1982年（昭和57年）にはラマ9世通りの現在地に校舎を新設し現在に至っている。

#### （4）学校経営

##### ①校訓 広い心で「明るく なかよく たくましく」

この校訓は、昭和37年9月1日に制定されました。広い心でとは、いろいろな事象に対して誠実に思いやることができるという心の広さと深さをもつ人であってほしいという願いが込められており、世界のどこにあっても愛される人間の育成をする必要があることを意味している。

##### ②教育目標 豊かな広い心を持った子どもを育てるために

- （1）思いやりのある子（徳育）
- （2）創造性を発揮し、積極的に学ぶ子（知育）
- （3）心身の健康をつくる子（健康）
- （4）国際性豊かな子（国際性）

##### ③教育方針

- 思いやりのある人になろう ○ 創造性を発揮し、積極的に学ぼう
- 心身の健康を自らつくる力をもとう ○ 国際人としての基礎をつくらう

##### ④教職員（文部科学省からは定員の8割が各在外教育施設に派遣される）

教員数105名（タイ人マネージャー1名、文部科学省派遣教員64名、  
海外子女教育財団派遣教員21名、現地採用日本人教員1名、  
タイ人教員5名、英会話担当外国人教員9名、タイ人水泳コーチ4名）

事務職員数10名（日本人4名、タイ人6名）、

看護婦2名（タイ人2名）

用務員17名（タイ人17名）その他警備会社から数名の警備員が常駐。

合計134名のスタッフで運営されている。

#### （5）危機管理

##### ①下校の時刻厳守

下校のバスの出発時刻厳守が、徹底されていた。「パスポートの次に大事なことは、ゲート通過の時刻を守ること」と先輩の派遣教員から指導を受けた。

教室での帰りの会、その後の短い休み時間が終わると、小学部の全学年がゲートを目指す。担任が先頭を歩き、各学級の児童がそのあとをついて歩く。ゲートのところで児童とハイタッチをして児童を送り出す。児童は自分のマンションに向かうスクールバスを目指し分かれていく。ゲートを出たところのバスの駐車場には、100台以上のバスが並ぶ。ゲートは、鉄製の重い扉だったように記憶している。警備員によってゲートが大きく開けられるのは、登校時と下校時のみ。24時間、ゲートには警備員が常駐し、すぐそばにはポリスボックス（交番）もある。警備員は、学校の敷地内に立ち入ることはあるが、校舎内に入ってくることはなかったと記憶している。バスのドライバーさんやモニターさん（添乗員、現地バス会社のスタッフ）が、学校の敷地内に入ることもない。バス会社のスタッフは、ゲートとその外にある門に囲ま



れたバス駐車場で、下校時刻まで待機している。

教職員が、学校の敷地内と外を行き来したり、何らかの理由で遅れて出勤したりする場合は、ゲートやゲート付近の警備員の待機場所で顔写真入りの身分証（名札）の提示を求められる。

では、再びバス下校の様子を記述する。

バスの乗車口には、マンション名が書かれていて、モニターさん（添乗員、現地バス会社のスタッフ）は、その日に乗る児童生徒の氏名リストをもとに、1人ずつ確認する。どのバスにだれが乗るのかをバス会社が全部把握していて、欠席の児童生徒の連絡など、詳細部分まで滞ることがないように学校とバス会社が連携を図っていた。通学バスの安全でスムーズな運航のために、校務分掌が存在した。

マンションごとのバスに間違えずに乗り、自分のマンションに帰るという当たり前のことが、時には労力を費やすこともあった。全員のバスの乗車が確認できないとバスは出発しない。

教職員が無線で連絡を取り合い、旗で合図を送り、警察も出て交通規制が整い、ようやくバスが学校を後にする。全部のバスが出ていくまでに15分くらいの時間がかかる。児童生徒は渋滞に込まれると1時間近くバスに乗ることもあったようだ。通学バスの発車が遅れ渋滞に巻き込まれると、帰宅時刻が遅れるため、保護者から問い合わせの電話がかかることもあった。

児童生徒の90%が、通学バスを利用し、その費用は、保護者の負担である。バス料金の資料が残っていないので金額はわからなかったが、けっして安くはなかった。バスについては、保護者（PTA）とバス会社の取り決めもあったようだ。

児童生徒が、無事に何事もなく学校の行き帰りをすることは、あたり前のことだけれど、諸外国の事情によっては難しい。「ゲート通過の時刻



モントリー社によるスクールバス

の厳守」は、児童生徒の生命の安全に直結することだったと今でも認識している。

## ②緊急事態発生

派遣期間中に、タイ国内で緊急事態が発生した。現在もタイ国の政情に、その影響が残っているのではないかと考えられる。政治的なことを書くことはできないので、緊急事態が発生し、自宅待機となったことをここには書くこととする。

深夜であったが、緊急連絡網で連絡があった。

大使館からの情報と日本国内からのニュースにより、バンコク都内の状況を知ることができたが、自宅近くはいつもと同じ日常であった。

## ③避難訓練や安全点検の実施、緊急一斉下校訓練

日本国内と同様に、避難訓練や安全点検を実施した。火災や地震、不審者侵入を想定した訓練は、ほぼ日本と同様に実施した。

緊急一斉下校訓練というものがあり、教職員が、通学バスに乗り込みマンションまで同乗し、目的地のマンションで児童生徒を保護者に引き渡す訓練があった。現在行われている引き渡し訓練と似ているところがある。違いがあるとすると、マンションの敷地内で引き渡すことである。この訓練は、洪水が予想される場合や交通規制が発生する場合のためのものであった。派遣期間中に、緊急一斉下校が行われることはなかったが、赴任する数年前には、交通規制があるという情報が学校に入り、緊急一斉下校が実施されたということである。

#### ④ドライバーを雇用する

ドライバーを個人で雇い、自家用車はドライバーが運転していた。3年間の派遣期間の間、自分で車を運転することはなかった。

### (6) 授業のことなど

18年度は6年生、19年度は5年生、20年度は6年生の担任をした。

音楽科や図画工作科、家庭科には専科教員が配置されていた。また、タイ語や英語の授業もあった。

3年目の6年担任では、社会科と体育科を受け持った。前年度から6年部は教科担任制（専科制）となっていた。中学校と同じようなスタイルで授業が進むのは、とても新鮮で、学んだこと吸収したことがたくさんあった。通知表も形式が大きく変わり、データ化された。今でこそ、通知票と要録が電子化されているが、当時としては画期的であった。

また3年目は、教材研究と生活ノート（日記）の返事、学級通信に、情熱を注いだ参観日を前にした教材研究では、中学校社会科教員のアイデアと知恵をもらい、充実した授業が展開できたように記憶している。専科の授業は新鮮なもので同じ授業を実践することができるので、授業の精度が上がっていく感覚があった。

保護者の学歴も高く、教育に対する関心はものすごいものがあつた。参観日の保護者の出席率は200%で、教室に入り切れない保護者、教卓のすぐ横にまでいる保護者から熱い視線を受けながらの授業は、かなりのプレッシャーであつた。もちろん授業評価もあり、下手な授業はできず、日頃の授業から積み上げていき、参観日の授業には勝負をかけるという覚悟であつた。日々の授業の経験は、その後につながつたと確信している。

### (7) 修学旅行

6年部を2回経験したので、修学旅行の引率を2回したことになる。2泊3日でタイ国の北部チェンマイを訪問する修学旅行は、貴重な体験として残っている。

航空機を利用した修学旅行で、その旅客機は貸し切り状態であつた。準備に費やすエ



授業参観のようす 保護者200%

18年度派遣教員の授業（同期派遣）

エネルギーも大きいものがあった。旅行引率中も深夜まで打ち合わせをして、翌日も早朝より活動した。

現地校との交流、ぞうトレッキングなど子どもたちも貴重な異国での経験を積んでいると捉えている。



エレファントキャンプに向かう道筋で



現地校とのゲーム交流



象トレッキング



民舞の披露



組み体操披露

## (8) 臨海学校

5年部のときには、臨海学校を経験した。日本でいう宿泊学習と同様の行事であったと捉えている。

遠泳について、実際の距離は覚えていないが、現地スタッフや船による安全確保により、教職員の負担は軽減されていた。リゾートホテルからすぐの場所を泳ぐことや現地の医療スタッフの態勢、ツーリストポリスによる安全確保など、考え方によっては、日本の校外行事よりも手厚いサポートがあるので、教職員は児童に対する指導と支援に集中できていた。



臨海学校の学級写真



遠泳のようす



砂浜での造形活動

## (9) 体育的行事（大運動会）

2008年11月2日には、第53回大運動会が実施された。運動会のスローガンは「北京につづけ！あの感動を今、ここに」であった。

全校児童・生徒数が約2,500人。運動会の実施で保護者も入れると5,000人から6,000

人が狭い運動場に集まることとなる。練習の時も運動会当日も、限られた時間の中でいかに競技を行うかが勝負で、分厚い資料を手に分刻みで動いた。システマティックに動くためのマニュアルが引き継がれ、教員の係は3年間ほぼ固定。日本各地で運動会や部活動、各種大会を運営してきた教職員が、それぞれの役割で適材適所で働くのだから、運動会当日は、どんなことがあっても時間通りに、無事に、充実して終わっていった。

種目としては、3年間、高学年部に所属したので組体操を学級担任として指導することとなった。5、6年生合わせて約600人が組体操をするので、ものすごいスケールの演技であったことを覚えている。今でこそ、時代の流れで実施することのない組体操だけれども、5、6年の先生方で演技を仕上げたものだと思う。

この日の日本人学校の敷地内への入場は、バスのチケットが入場券となり、なおかつ、チケットの申し込みは7月には実施。運動会のために日本から祖父母がやってくるなど、予想することができないスケールの大きさを感じた。



運動会開会式。ラジオ体操

### 3. あいさつとチームワーク

#### (1) あいさつの大切さ

日本人がよく行くフジスーパーというスーパーがあった。土曜日や日曜日には、必ず保護者に会える場所であった。休みの日は、デパートやショッピングモールに出かけても、観光地に行っても必ず保護者の方に出会う。

「うっちー、どこに行ってもあいさつするんやで」「あいさつだけでええんや、そうしたらなあ…」「あいさつしとったらなあ…」と教えられた。うまくいかないときこそ、勇気を出してあいさつをしようと考え、はつらつとした明るいあいさつを心掛けた。学級経営が行き詰まった1年目に、誰に対してもあいさつを続けることができたことは、その後の学級経営や生徒指導対応に活かされていると考えている。

#### (2) チームワーク

派遣年度によるまとまり（18年度派遣なのでイチハチと呼ばれていた。）、学年部（〇年部）によるまとまりが強固で、困ったことがあると結束して行動した。また、派遣年次をこえたつながりが生まれたときには、さらに強固なつながりや結びつきができた。

修学旅行で数日間出張のとき、わが子の入浴のサポートをしてくださったのは管理職の家族であった。祖父母のサポートがない異国の地において、家族の代わりとなるあたたかいサポートは一生忘れることはできない。

管理職を中心とした学校のまとまり、学年主任による学年のまとまりなど、チームに所属することの意味を感じる場やチームにあこがれる瞬間が何度も訪れるので、チームワークは自然に高まり、チームのために心を尽くす仲間の輪が広がっていく。

チームの一員として、チームのために歯車になろうという考え方が自然に発生して

いくので、あらゆるものが高まっていった。

#### 4. 終わりに

##### (1) 家族への感謝

在外教育施設への派遣を振り返って、一番に思うことは、家族への感謝である。家族への感謝は、同時に妻への感謝である。妻の理解、妻の支えがなかったら3年間は乗り切れなかったと思う。

生まれたばかりの娘を、異国の地で育てることは、言葉にすることができないくらい大変なことだったと思う。海外での生活は、心配すること、苦勞することも多かったはず。一言では言い表せないけれど、表すとすると「感謝」という言葉になる。

娘の年齢は、バンコクの地に赴任した年月とも重なる。節目を迎える度に「思い出」とともに、「感謝」も忘れずに言葉にしたいものだ。

##### (2) 派遣されたこと（赴任したこと）への感謝

派遣されたこと（赴任したこと）に感謝したい。選んでもらえなければ、貴重な経験は積むことができなかつたと考え、そのことに関係する方々や組織、仕組や制度に感謝したい。

商社や大手企業とは異なる地方公務員の立場で、派遣（赴任）の機会をいただくことは稀だと捉えることができる。派遣されたこと（赴任したこと）が良かったと振り返ることができるのは、先輩方の功績や産業界の方々の努力もあるだろう。

いずれにしても、派遣されたこと（赴任したこと）は、「有難い」経験だったと感謝の気持ちをもちたい。

##### (3) 感謝と縁

今回の原稿執筆にあたり、その機会をいただいたことに感謝している。

書くことにより、派遣当時のことを思い起こし振り返ることができた。時が経つにつれて忘れていくことも多いけれども、貴重な経験は、今の職務のどこかに活かされているはずである。山口県国際教育研究会に支えてもらっていることを感じずにはられない。感謝したい。

また、派遣前、派遣当時（赴任当時）、帰国後に共に過ごした仲間に感謝したい。派遣年次が違っても、国や地域が違っても、その時その場所で過ごした縁は、何かあるのだろう。支え支えられ、これからも続く職務の中で、人とのつながりを素敵な縁ととらえ、大事にしていきたい。

##### (4) 次回の執筆では

次回の執筆では、チェンマイ補習校に派遣されたときのこと、現地資料をもとにした社会科の授業実践、専科による授業実践の記録、生活ノートのこと、研究組織等について記憶をたよりにして執筆したいと考えている。

## こんなところにスリランカ！

山口市立宮野小学校 教頭 井上 秀雄

(平成19年度派遣 スリランカ コロンボ日本人校)

「スリランカ」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべるでしょうか。「インドの下にある島国で紅茶が有名」とお答えになる方が多いですが、あまりなじみのある国とは言えません。

「コロンボ日本人学校」と赴任先の連絡を受けた時にも、家族みんなで首をかしげ、これからどんな生活が待ち受けているのか、期待よりも不安が大きかったことを覚えています。

しかし、そんな思いをあっという間に払拭するほど、人情に厚い国民性と豊かな自然に心奪われてしまいました。帰国して14年過ぎましたが、我が家のスリランカへの愛着はまだ冷めることはありません。山口の地で体感できるスリランカをご紹介します。

### スリランカってどんな国（基礎データ）

国名	スリランカ民主社会主義共和国
首都	スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ
公用語	シンハラ語 タミル語（連結語 英語）
民族	シンハラ人（約75%） タミル人（約15%）
宗教	仏教(70%) ヒンドゥ教(13%) イスラム教(10%) キリスト教(8%)
面積	6万5,610 km <sup>2</sup> （北海道の約0.8倍）
人口	約2,218万人（2022年）

### 1. 紅茶のフェアトレード

スリランカの主要産業である紅茶の生産は、紅茶農園プランテーションで行われています。農園の労働者の多くは、かつて植民地時代にインドから強制的に移住させられたタミル人です。その居住環境は決して恵まれたものではなく、狭い長屋に5、6人で生活し、農園で生涯を過ごす方が多いようです。また、労働者の高齢化が進み、茶葉の手摘みは大きな負担となっています。

私たち消費者が高品質の紅茶を飲むために、生産者の労働環境や生活が十分に保障されなくてはなりません。ところがこれまで途上国で生産された食料品などが驚くほど安い価格で販売されていることがありました。その安さを生み出すために、正当な賃金が生産者に支払われなかったり、生産性を上げるために農薬が多用され環境が破壊されたりするという事案も起こっているようです。



【国際フェアトレード認証ラベルの付いた商品】

この状態を改善するためにフェアトレード（公平・公正な貿易）の仕組みを構築する必要性が世界で主張されています。このフェアトレードにより、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することが可能となり、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善を促すきっかけとなります。

市内で買い物をしていると「フェアトレードマーク」が記載されている商品を目にすることがあります。紅茶に限らずフェアトレードにより輸入された商品を購入することで、持続可能な生産と自由貿易の適正化に貢献することができます。少し関心を持って商品を手にとってみてはいかがでしょうか。

(参考資料：日本フェアトレード委員会HP)

## 2. スリランカ象

10年前に周南市の徳山動物園にスリランカ象「ミリンダ」と「ナマリー」がやってきました。

スリランカでは象が神聖な生き物と考えられています。スリランカ政府は象を保護するため、親を亡くしたり、群れからはぐれたりした子象を保護するために「ピンナワラ象孤児院」を設立しています。2頭の象もその施設で保護されていたそうです。

とても立派なゾウ舎が建設されており、今は2世誕生も期待されているとのこと。休日に何度も足を運び、のんびり歩く象を眺めてはいつも癒やされています。



【いつ見ても癒やされます】

## 3. ボランティア活動

赴任当時は小学生だった娘が、スリランカでの経験から国際交流に携わるボランティア活動に参加するようになりました。

スリランカでは、都市部から離れた村のインフラ整備は充分進んでおらず、雨期には水没する道路が多いです。その道路を整備し、地域の産業や人々の生活を支えるために、多くの若者が開発途上国に出向き、交流を深めています。



### おわりに

在外教育施設派遣の経験により、身近にあるものや出来事に対する見方や感じ方が変わり、家族の生き方にも大きな影響を与えています。

山口で生活していても、世界の人々との交流は可能です。国際理解教育に関心ある先生方を一人でも増やし、背中を押してあげたいと思います。



【ポーピティヤ村のホストファミリーと】

## スペイン・マドリッドでの生活を振り返って

山口市立小郡中学校 非常勤講師 安岡 義郎  
(平成 23 年度派遣 スペイン マドリッド日本人学校)

### 1. はじめに



私は、昭和 63 年より 3 年間、アメリカのシカゴ日本人学校に赴任しました。その体験を生かし、管理職として、再度の海外派遣に挑戦しました。その 2 度目が、スペインのマドリッド日本人学校でした。

### 2. マドリッド市

スペインの首都マドリッドは、太陽の恵みを受け、サッカー、闘牛、フラメンコなどに代表される情熱的な人々の住んでいる街です。

また、石畳の続く街中には、王宮や様々なモニュメントや美術館などが立ち並んでいます。

16 世紀から首都として栄えてきたこの街は、600 万人以上の人々が暮らす、政治と経済の中心地、そして国際都市でもあります。



市街地にある市役所

### 3. マドリッドの気候

6 月頃までは、雨と晴れ間が入り交じりますが、その後は、30 度後半から 40 度近い日差しが降り注ぎます。しかし、湿度が低く、木陰に入るとひんやりします。また、2 か月近く雨が降らなくても、スプリンクラーが朝や夕に活動しており、街路の多くの緑が我々の心を和ませてくれます。

### 4. スペイン人の一日

スペイン人の生活帯をみますと、日照時間からきていると思われるところが大です。夏の最盛時間は 22 時頃に日没となります。そのためか、夜の 9 時を過ぎても子どもの遊ぶ声がします。日没が遅い分、夜明けも遅く、私が出勤する 7 時頃は暗闇の中です。

夕食が午後 10 時頃で、朝のラッシュは、9 時頃のように 11 時頃におやつタイムで、昼食は 2 時頃が多いようです。企業も、午後 2 時～4 時頃に休息をとるところが多く、レストランは、16 時頃に一旦閉め、20 時 or 20 時半になって、夜の部が開店します。日本の生活時間帯で対応すると、無理が生じてきます。



朝 7 時はまだ暗闇(9 月)

### 5. スペインの食べ物



イチジク

食べ物は、パンが主食ですが、米や海鮮を用いた食材も多く、我々日本人の味覚にはピッタリの感がします。中でも、パエリアは日本人にも人気があり、種類も 10 種類近くあります。また、オリーブオイルやワインは世界にも名だたる産地として、その専門店も多く見受けられます。更には、果物も種類が多く、たくさんの豊富な品数が店先を飾っています。例をあげると、イチゴ、イチジク、メロン、スイカ、桃、柿 …… イチジクや柿はちょっと意外でした。



## 6. スペインの集合住宅

私が住んだ居住宅は、「ピソ」といわれる集合住宅で、我が家は、その最上階の4階にあり、屋根までの屋上部分も居住空間として建築してあるため、4階にある2階屋の感じです。1階は主に日々の生活に使用し、2階は、客室と普段使用しない物の物入れにしていしてました。



手前右の最上階が我が家

私の住んでいた「ピソ」の周囲は、集合住宅が多くありましたが、それぞれのピソ毎に囲いがしてあり、安全のためのセキュリティーが2重・3重にしています。

## 7. スペインにおける治安

前述のセキュリティーに繋がることですが、全般として、日本に比べ、治安が悪いので、用心に用心を重ねることが大切です。街中はもちろんですが、レストランなどでも物を置いて離れないことが大切です。わずかの時間でも、置き引きにあった例を何度も耳にしました。ショルダーバッグ等も、前側にぶら下げ、手で押さえるくらいの用心さが必要です。

また、治安に関連することでもありますが、公園等も含め、公衆トイレの無さにびっくりします。わずかに大きな駅の構内にある程度です。したがって、レストランやちょっとしたカフェ等を利用した時には、必ずトイレを済ませることを心がけておくことが大切です。なお、有料駐車場の施設内やカフェの中のトイレはセキュリティーが掛かっているため、利用者でないと入れない仕組みになっているので、注意が必要です。

## 8. スペインの車

大部分の車がマニュアル車で、左ハンドルの右側通行ですから、慣れるまで、かなりの時間を要すると思います。また、右折・左折の多くは信号でなく、ロトンド（ロータリー）で曲がります。それも、2～3カ所の出口は普通で、中には、5



歩道→ロトンド

～6カ所のところも多くあります。更には、日本と異なってる点として、横断歩道が盛り上がってることです。したがって、車体のバウンドを防ぐためにも、必ずスピードを落とさないといけません。これは、ある意味、横断歩道に注意するということにも繋がっているようでした。

## 9. スペイン語

マドリッドでの生活で最も苦勞したのは、言葉(スペイン語)でした。街で出会う見知らぬ人も笑顔で挨拶をくれますが、「Hola!」と返す程度で、随分失礼な対応であったことを恥じています。何とか、日常の基本的な挨拶と数字が発せられるようになるのに、半年はかかりました。 ※次ページ参照

## 10. おわりに

スペイン語を中心に、苦勞も多かった2年間のマドリッド生活でしたが、今、こうして振り返ってみますと、普段では味わうことのできない生活を送ることができました。可能であれば、もう1度住んでみたい、心に残る場所です。

(※2011年から2年間の内容)

(参考資料) 日常の基本的な挨拶と数字

こんにちは おはよう さようなら はじめまして 元気？ 元気だよ ありがとう どういたしまして すみません いくらですか？ (トイレは)どこ？	Hola! Buenos dias Adios Mucho gusto Como esta? Bien, gracias Gracias De nada Perdon Cuanto cuesta? Donde esta (el servicio)?	オラー ブエノス ディアス アディオス ムチョ グスト コモ エスタ ビエン グラシラス グラシラス デ ナダ ペルドン クアント クエスタ ドンデ エスタ
数 字	1 uno ウノ 2 dos ドス 3 tres トレス 4 cuatro クワトロ 5 cinco スインコ 6 seis セイス 7 siete スイエテ 8 ocho オチョ 9 nueve ヌエベ 10 diez ディエス	11 once オンセ 12 doce ドセ 15 quince キンセ 20 veinte ベインティ 100 cien スイエン



入学式



卒業式



3.11の追悼式(スペイン大使館にて)



居住地近くのスーパー



日本人会主催の盆踊り(会場は日本人学校)

※どなたでも参加可

# マドリッド便り

NO. 4 平成23年 9月

Yoshiro & Nobuko Yasuoka  
C/Murillo, 5, 3<sup>o</sup>-A  
28222 Majadahonda Madrid  
Espana

Tel +34-91-485-9632  
Email yasuoka0828@yahoo.co.jp

## マドリッド日本人学校の様子 (一学期) その1

### 新年度のスタート 4月11日(月)



入学式

校庭の芝生の緑も輝きを見せてくれていた4月、在スペイン日本国大使館附属マドリッド日本人学校の平成23年度がスタートしました。児童生徒数12名(小学部9名、中学部3名)、派遣教員8名、現地採用教職員5名の大変小規模な学校です。

本校は、今年創立30周年を迎えています。創立時は、商社を中心とした日本からの進出企業も多く、児童生徒も200名近



入学式当日の記念写真

くいました。学校は、日本企業でつくられている「水曜会」の企業の子どもたちのために設立されたものです。広大な敷地に建てられている100年近い石造りの建物(地上3階、地下1階)を小学部棟及び本館とし、購入後に新たな施設として運動場、体育館、中学部棟などが新設並びに整備されています。しかし、バブルの崩壊後、企業の撤退や縮小が相次ぎ、それに伴って児童生徒が減少しています。

今年度の児童生徒は始業式以後数名の出入りがあり、9月16日現在、小学部11名、中学部2名の13名で日々の学校生活を送っています。

### チャリティコンサート 6月4日(土)



一瞬にして多くの犠牲者と共に跡形もない悲惨な姿となった3月11日の「東日本大震災」。今、母国日本はこの未曾有な状態から、確実に復興へ向けて大きく動いています。その大きなうねりに、遠い地からではありますが、私たちの思いを少しでも届けたく、現地のギター演奏者と忍術の会のお手伝いをいただき、『チャリティ・イベント』を行いました。児童生徒も自分たちの出来ることを授業や授業の合間に準備をし、当日は来場者の誘導や募金活動等で参加をしました。

お陰をもちまして**多くの方の善意**をいただくことができました。



ギター演奏

### 運動会 5月22日(日)

抜けるような青空の下、多数のご来賓並びに保護者や当地在住の皆さまのご来場をいただき、実施することができました。少人数ゆえ、保護者を交えての赤白に分かれた戦いとなりました。学校側の立場として、特に次の2点を強く感じました。



白団の児童生徒と保護者

①来賓や地域等の外部からの来場が大変多く、競技にも積極的に参加され、共に盛り上げていただいたことは、今後の本校の更なる発展に繋がることと確信できました。中でも、補習校からの参加が例年以上に多く、これからの緊密な連携に明るい見通しを抱きました。

②人数は少なくても、団結すると素晴らしい力になることを実証してくれた子どもたちの素晴らしい力に大きな感動をもらいました。更には、中学生は小学生を温かく見守り、小学生は中学生の指示を安心して任せている。こんな家族のようなマドリッド(マドリッド日本人学校の略称)の姿が随所に見られました。



赤団の児童生徒と保護者

### 宿泊体験学習 6月8日(水)～10日(金)

晴天の中、実りの多い2泊3日の体験学習を送ることができました。“自然とも**絆**とも**絆**を深めよう!!”をスローガンに、スペインの自然と親しみながら仲間との繋がりが更に濃くなった3日間でした。



参加者と指導員

子供たちは、やがて社会へ飛び立っていきます。そのときに適応できるための力を身に付けるための学習として、このような体験学習は重要視されてきています。学校を離れ、また、親元を離れての宿泊ということで、保護者の皆様も心配されたことと思いますが、子供たちはこのような学習を通し、大きな成長をしていきます。仮に失敗があっても、そこから「生きる力」が養われてきます。不自由と感ずるところから知恵が生まれ、仲間の力を借りようとします。困ってる人を見て、声を掛け、支えてあげようとします。そういう姿が随所に見られた宿泊学習でした。



4.6 今年赴任の4人(バラハス空港)



4.11 着 任 式



5.22 運動会;参加した地域の子ども



5.22 運動会:児童生徒のキッズ・ソーラン



5.8 宿泊体験学習の1コマ



5.10 宿泊体験学習の1コマ



5.9 宿泊体験学習の1コマ



五月晴れの中泳ぐ校庭の「鯉のぼり」



ホールに飾られた「かぶと」



青空の下、校庭でのランチ今

# マドリッド通信

NO.4

平成24年 7月20日  
在スペイン日本国大使館付属  
マドリッド日本人学校

文責 安岡 義郎

## ～ 1 学期 を 終 えて ～

4月12日に平成24年度がスタートして以来、1学期も大過なく最終日を迎えることができました。これもひとえに保護者の皆さまを始め、様々な関係機関の方々の日頃からのご協力並びにご支援の賜と思っております。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

今年の1学期は、9名の短期入学生を迎え、例年になく活気ある子どもたちの姿を随所に見ることができました。そんな中、運動会や宿泊体験学習などの行事を通し、子どもたちは確実に成長をしています。身体はもちろんですが、日本人としての相手を思いやる心や周囲の様子から自分の言動を考える姿勢、また自分の意見を発表する姿などは顕著な成長といえると思います。

ところで、私は今学期の始業式で「節目」についての話をしました。私たちの生活には、色々なところに節目があり、その節目に差ししかかったとき、反省をしながら次のステップへの目標を定めていきます。したがって、その節目を大事にする人は、その後の成長も素晴らしいものがあります。小中学生にとって、学年の変わり目や学期の始め及び終わりは、最も大きな節目といえます。そういった意味からも、お子さまにとって、この学期の終わりは次への段階へ向かう絶好の機会です。今日の1学期の締めくくりとして、ご家庭でも、今学期の成果と次なる目標についての話し合いの場をもってほしいと思います。そして、そのことが、明日からの長期休みに繋がり、更には、2学期からの新たな土台となることを願っています。



「八丈太鼓」の皆さんとの記念写真

## ～ 体験入学 終わる ～

38名の新しい仲間を迎えて始まった4週間にわたる「体験入学」も今日で終わりとなりました。この期間、体験生の皆さんは、日本の文化や様式に触れながら、沢山の思い出ができたことと思います。スキー教室や水泳大会でのマド日生との交流、盆踊り大会や七夕集会等での日本文化の体験など、わずかの期間にもかかわらず、多くの「日本」を全身で浴び、より「日本」が身近に体感できた体験入学だったと思います。是非、来年も本校の門をくぐって来てほしいと願っています。教職員一同、心待ちしています。



体験初日の集会



体験2週目の集会

## マド日生と体験生との交流行事

### ・ スキー教室 (7月6日)

マド日生も体験生も毎年楽しみにしているスキー教室が今年も行われました。「スキーは初めて」という子も沢山いましたが、子どもの力はすごいものがあります。指導員に1～2回ついてもらった後はす～いすい。友達同士、声をかけ合いながら気持ちよさそうにすべっていました。暑い日が続いている中、束の間の涼を味わうことができた一日でした。



(上左より)小学部1・2年、3・4年、5・6年、中学部

### ・ 水泳大会 (7月20日)

1学期の最後を飾る行事として、多くの保護者の皆様のご声援をいただきながら、水泳大会が昨日開かれました。児童生徒は、この大会のために自己の目標を設定し、取り組んできました。この大会のねらいでもある、マド日生と体験生との交流を、一人ひとりがしっかりと受け止め、更には、各自が自己の目標に向けてのベスト更新を目指し、その力を発揮してくれた大会となりました。



「カジキ」チーム



「サメ」チーム



「〇〇〇」さんの開会の言葉



「〇〇〇」くんの閉会の言葉

# 日 本 文 化 の 体 験

## ・七夕集会 (7月5日)

子どもの夢を育む日本の伝統的な文化の1つに「七夕」があります。



願いを込めて…

夢や願いを短冊に書き、笹に結わく行事です。マド日でも、児童生徒の願いを記した短冊を笹の葉に結び、ホールに立てかけていました。それぞれの願いが成就することを祈っています。



七夕の前で(小学部)



七夕の前で(幼・中学部)

## ・八丈太鼓 (7月17日)

日本の芸能文化である「八丈太鼓」の方々が、この度、その技の披露や継承を



迫力のある演技

目的に、当地マドリッドへ来られました。縁あって、本校にもお越しになり、子どもたちにワークショップをしていただきました。子どもたちも熱心に取り組み、楽しい時間となりました。最後に、模範演技も披露していただき、その迫力ある演奏に、思わず酔いしれてしまいました。

## ・盆踊り (7月15日)

夏の「風物詩」でもある盆踊りが本校を会場に開催され



エイサーの演技

ました。1300余名もの来場者があり、国際色豊かで活気に満ちたお祭りとなりました。本校の子どもたちも、小学部1～5年生の「エイサー」と「盆踊り」、6年生と中学部の「和太鼓演奏」で参加を



和太鼓の演奏

の「和太鼓演奏」で参加をし、大会を盛り上げてくれました。

## 中学部の行事 から

### 〈期末テスト〉

日本人学校は、日本の学校と同じ教科書を用い、同じ教育課程の編成をしています。



したがって、学期の終盤には、テストを受ける中学部の4人その学期のまとめをするときでもあります。中学部では、そのまとめとして、**学期末テスト**を実施します。本校の1学期の期末テストは、6月21・22日の2日間、国語・社会・数学・理科・英語の5教科を行いました。

このテスト期間中は、中学部の皆さんにとって、精神的に追い詰められた毎日だったようです。

### 〈幼児体験学習〉

日本の中学校では、キャリア教育の一環として、幼稚園の訪問や幼児との触れ合い学習があります。



幼児との触れ合い

マド日には、幼児が体験生として入学しているこの時期に、幼児との触れ合い学習を実施しました。

6月29日と7月13日の2回にわたり、短冊作り、本読み、紙飛行機作りなどで触れ合いをもちました。中学生にとっても初めての体験で、事前の準備から色々と工夫をして臨んでいただけに、とても貴重な体験となったようです。



アナ先生

【お知らせ】 今学期をもちまして、スペイン語担当の「アナ」先生が本校を退職されました。これまでのご指導に感謝申し上げます。

## 【 8・9月行事予定 】

日	曜	行事内容
8/27	月	※夏休み最終日
28	火	始業式 中学部実力テスト マド日(ペース走)
29	水	夏休み作品展(～9/16)
30	木	代表委員会
31	金	
9/1	土	
2	日	
3	月	
4	火	
5	水	
6	木	忍術
7	金	部活動 剣道
8	土	
9	日	聖マリア・デ・ラ・カベサの日
10	月	
11	火	
12	水	ボカディージョ・ランチ
13	木	マド日(ペース走) 忍術
14	金	部活動 剣道
15	土	
16	日	家族参観日
17	月	振替休業日
18	火	マド日(ペース走)
19	水	
20	木	忍術
21	金	部活動 剣道
22	土	
23	日	
24	月	
25	火	マド日(ペース走) 代表委員会
26	水	
27	木	忍術
28	金	中学部職場体験 部活動 剣道
29	土	
30	日	

# マドリッド通信

NO.11

平成25年 3月 8日  
在スペイン日本国大使館付属  
マドリッド日本人学校

文責 安岡 義郎

## 一年間、大変お世話になりました そして ありがとうございます



校庭のアルメンドロ

自然界に目を向けますと、春の装いが感じられる頃となってきています。校庭のアルメンドロも、淡いピンクの花を開かせ、私たちの心を温かく癒してくれています。

一年の経つのはほんとうに早いものです。つい先だって小・中学部の新入生をそれぞれ迎え、平成24年度がスタートしたと思うまもなく、今年度も残り1週間となりました。

この一年間を振り返りますと、子どもたちは、本校の3大イベントである「運動会」、「宿泊学習」、「文化祭」を始め、全校での社会見学、小学部の施設訪問や現地校との交流会、中学部の職場体験学習等々の行事をこなしてきました。また、日本人会主催の「盆踊り大会」

や「餅つき大会」への参加なども通し、一人ひとりが確実に成長してきています。身体はもちろんですが、考え方や感じ方にも大人への歩みが見られています。

子どもたちも、それぞれの学級で、この一年間の成長を、文章等で表現しています。保護者の皆さまも、是非じっくりとその足跡をご覧ください、それぞれのお言葉で祝ってあげてほしいと思います。それが、新年度への新たなエネルギーになると思っています。その時に大事なことは、この際ということで、あれもこれもと欲張るのではなく、2つか3つ位にポイントを絞ってのお話しが大切であるかと思っています。マド日の全てのお子さまたちが、今年の成長を糧に、次の段階へ羽ばたいてくれることを切に願っています。

まもなく、それぞれの学年が無事に終了しようとしています。このことは、ひとえに保護者の皆さま並びに地域の関係各位の皆さま方の日頃からのご協力・ご支援の賜とっております。改めまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、この一年間、大変お世話になりました。

私たち教職員も、それぞれ一人ひとりが課題を明らかにする中で、来年度の指導にあたる覚悟です。新年度も、今年度と変わらぬご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。



## 卒業式の練習

「卒業式」まで一週間となりました。マド日タイムの時間を中心にしなが、その練習にも力が入ってきています。



練習風景

中でも、小5と中1・2の5名の「はばたけ未来へ」の実行委員は、要所、要所での指示伝達などに余念がなく、素晴らしい活躍をみせてくれています。

音楽の時間に練習している式歌の合唱が、この校長室にもしっかり届いており、当日へ向けての意気込みが伝わってきています。また、在校生から卒業生へ贈るメッセージもスムーズにいくようになってきているようです。そんな在校生の想いが、本番でしっかり出せることを願っています。



練習風景

## 児童生徒全体会

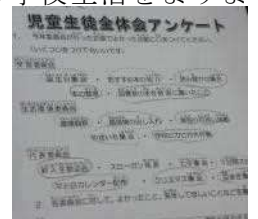
2月14日(木)



生活環境委員会

今年一年間の各委員会(学習委員会、生活環境委員会、代表委員会)の活動を振り返りながら、次年度の活動への橋渡しをすることを目的として、全体会が開かれました。

後期の委員長からの活動報告と、それぞれの委員からの思い出に残った活動や成長した点などが発表されました。委員会は、自分たちの学校生活をよりよくするためにあります。そのために頑張ってくれた今年度の各委員の皆さんへ拍手を送ると共に、来年度の更なる健闘を願っています。マド日の活性化のためにもよろしくお願いいたします。



アンケート

## 中学部期末テスト 2月21・22日(木・金)



中学部の5人

日本では「学年末テスト」とも呼ばれていますが、先月末の2日間、中学部の生徒が、今年度最後の定期テストに臨みました。生徒のテスト前の計画的に取り組んでる姿を目の当たりにし、この1年間の成長を感じました。このテストの結果を大事にし、これからの自分に繋げてほしいと思います。

## 中学部「剣道」



アスン先生と切通先生

※体育の授業

学習指導要領が改訂され、小学部は昨年度より、中学部は今年度から実施されています。その改訂の1つに、中学部での体育に武道の取組が義務付けられました。

本校では、2月の中旬より「剣道」を行っています。その講師として、現地の有段者であるアスン先生をお迎えしています。アスン先生は、20年位前に日本へ行く機会があった際、偶然、その時の知人の誘いで剣道にのめり込むことになったそうです。今は、毎週金曜日の夕方、本校の体育館で「剣道教室」をされており、日本人だけでなく、スペイン人も参加しています。

中学部の生徒は、この剣道の授業を通し、技術の他に精神面での勉強にもなっているとっています。



剣道の授業より

## 部活動・全校体育



全校体育でのフットサル

ここマドリッドでは、安全面という点から放課後の課外的な活動が取りにくいいため、どうしても日本の子どもたちに比べ、体力が心配されています。そこで、金曜日の放課後に「部活動」を、マドリッドでは「全校体育」を実施してきました。競技種目は、施設・設備の面での制約があるため、色々と工夫をしています。

その部活動も、先月の22日で今年の最終日となりました。この日は、子どもたちに人気のフットサルで汗を流していました。最後は、みんなで1年間の振り返りもしました。



部活動の振り返り

## ひな祭り



小学部1・2年生

3月3日は女の子のお祭りの「桃の節句」です。それに合わせて、小学部1・2年生の生活科の時間に、3人の児童がホールにお雛さまの飾り付けをしてくださいました。ああでもない、こうでもないと言いながらも、楽しいひとときを送っていました。(6日には片付けられました)

## マドリッドに雪が…… 2月26日(火)



雪の観察

春になりきる前の寒さと暖かさが入り交じる一時期を「三寒四温」と言っていますが、2月はまさにそんな感じでした。上旬の寒さが一転して、中旬は温かい日々が続きました。このまま春を迎えるのかな?とと思ってた矢先、下旬は寒気が押し寄せてきました。昼間でも5度前後の気温が続き、奥に仕舞ってたコートを慌てて出した人も多かったのではないのでしょうか。そんな中、久しく見られなかった積雪があり、子どもたちを喜ばせてくれていました。早速、小さな雪だるまを作ったり、雪玉で遊ぶ姿が私たちの目に微笑ましく映りました。また、授業では、雪の結晶の観察もしました。こうした突然の変化に対応できるのも、小規模のマドリッドならではの特徴といえます。

## 安全面での取組



本校はご存知のように、築百年を経過している建物です。そのため、各所に不具合が生じているのが現状です。予算と照らし合わせながら、

計画的に補修等の工事を行っているところです。最近の大きな工事としては、体育館の屋根の補修、馬小屋の撤去などがあり、今年は2階の手すりからの落下防止用のネットの設置とプールの壁面の補修を手がけました。これらの工事には、日本の外務省からの補助金をいただくことができ、大変助かっているところです。



プール壁面工事

また、本館から中学部棟へ移動するところの扉を、新たに付け替えました。見通しがきき、小さい子どもでも容易に開ける軽いものとししました。



ドアの設置

### 【お知らせ】

平成25年度の始業式並びに入学式は、4月10日(水)を予定しています。



## 赴任後、1年間経って思うこと

下関市立安岡小学校 教諭 櫻井 紀邦

(令和2年度派遣 中華人民共和国 蘇州日本人学校)

### 1. 赴任時の体験が今に生きていること

帰国してからもうすぐ1年になります。赴任時に行っていた業務については、帰国後に直接役立っていることは、実はあまりありません。私が赴任していた3年間は、コロナ禍の3年間とぴったり重なりますし、特に中国ではゼロコロナ政策が実施されていたこともあって、その対応に追われた3年間でした。PCR検査の対応やオンライン授業の運営やコツ等、現在私が日々している仕事には必要ないので、それはそうです。

では、3年間の蘇州日本人学校の経験が全く役立っていないかということそうではありません。一番大きい変化は、私の心の構えといったようなものです。どういうことかと言いますと、自分とは全く異なった立場の人々について、自分だったらどうだろうと置き換えて考えることの大切さが赴任前に比べて数段深く心の中に沁み込んだような気がしているのです。もちろん、当たり前のことですし、今までもそのように心掛けてきたつもりではあるのですが、やはり現地で数年間生活することによって見えてくるがありました。逆に言うと、日本にいながらして、世界のそれぞれの地域で生きる人々の心や考え方や思いは、いくら報道を注意深く聞き、情報を集めても分からない領域がかなり大きいはずという実感が得られたように思うのです。私たちは、分からないところがたくさんあるままで決めつけたり、判断したりしてしまいがちです。日中関係では特に顕著かも知れませんが。時には、分からないことがあるのは承知で判断しないといけないこともあるでしょう。いずれにしろ、他人の立場でものを見て、考えて、感じることの難しさと大切さを私自身が再認識したことが、3年間の海外赴任を通しての私にとっての最大の収穫ではないかと思っています。

他人の立場に自分を置いてみて、考えること。児童も小さい頃から親や保育士さんからも教えられていることでしょう。それを、自分の学級の友達だけではなく、隣のクラスや他の学年の子供たちにも広げ、学校で働いている方々に広げ、地域の方々にも広げる。そして、日本の他の地域で暮らす人々にも、世界の様々な国々で暮らす人々にも広げる。そして、文化も、宗教も、年齢も性別も異なり、貧富の差もある、自分とは全く異なる人々の立場に自分を置いて感じ、考えようとする。そのきっかけを与え、導いていくことが初等教育においてとても大切なことだと心底思うようになりました。世界中で分断が進み、これからの世界がどのように変わっていくのか先が見えない今だから、なおさらです。在任中、また帰国後は特にこうした思いが私の中に深く根をおろすようになり、日々の授業や学校生活において、子供たちへの言葉掛けが変わってきていると感じます。

### 2. 思い出

最後に、気楽に思い出は？と聞かれたらすぐに浮かぶのは以下の2つでしょうか。1番は、担任したクラスの子供たちです。コロナ禍の中国ということで、渡航等の制限による様々な事情がどの子にもあり、そして校外学習がほぼできなかったこともあって、それぞれの子供たちとの教室での濃い関わりが大変印象深く残っています。

2番は、お茶です。未だに中国茶を日常的に楽しんでおります。持って帰った茶葉と茶器で、中国でのお茶体験を懐かしく思い出しながら、飲んでいきます。



## 「食」をととした地域づくり～ドイツ「Tafel」～

周南市立夜市小学校 教諭 藤本 浩行

(令和3年度派遣 ドイツ デュッセルドルフ日本人学校)

### 1. 「Tafel」とは

令和4年3月、デュッセルドルフ日本語教会で知り合ったKさんが、私が日本で「子ども食堂」に関心をもって活動していることを知り、ドイツにも食料の提供、食品ロスの取組があることを教えてくださいました。

ドイツのフードバンク「Tafel」とは、賞味期限の問題、包装の破損や在庫が多過ぎるなどの理由で流通できなくなった食品などの寄付を企業から受けて、生活困窮者などに配給する活動や団体のことを言うそうです。

Kさんの知り合いが、実際にデュッセルドルフにある「Tafel」でボランティア活動をしている方を紹介して下さったことが活動の契機となりました。場所は、デュッセルドルフ日本人学校から電車と徒歩で約30分のキリスト教教会の付属施設でした。Kさんを通して、責任者のBarbara様にボランティア活動をお願いしたところ、快諾してくださいました。

タイムリーにも、春季休業であったので、私もこの「Tafel」でボランティア活動をさせていただくことになりました。大まかに言えば、月曜日の11時～20時、火曜日の9時から12時までには開かれています。

私は、このボランティア活動を帰国まで可能な範囲で行いました。月曜日の午後からは、代休日や長期休みに行いました。平日なので夕方からは、勤務が終了してから通いました。

大まかに言えば2つ仕事があります。1つ目は食品を積んだトラックから降ろし、とりあえずコンテナに入れて種類ごとに大まかに分ける力仕事です。2つ目は、食品の傷みのあるものを除去して、野菜や果物をコンテナに丁寧に並べる作業と、食品を手渡す窓口の仕事です。



家族の人数を聞き、野菜や果物を提供する仕事をしている場面

### 2. ボランティア活動の流れ

まず、事務所で挨拶をして受付をします。その日の持ち場が告げられますが、明確に決められているのではなく、その日の状況に応じて他のボランティアの方と一緒に仕事をすることになります。本校のドイツ語の先生に協力を得て作成した自己紹介のカードを見ながらたどどしいドイツ語で挨拶をしました。私が日本人だと知ると、「この野菜は、日本語では何と言うのか？」などという質問もよくされました。

仕分けをする食料品には、種類別のプレートの絵とドイツ語・英語での表記があるので、助かります。ドイツ語の発音を聞き取ることが一苦勞です。中には、自分が欲しいものを要求する方や渡した食品が不要な場合は、戻す方もいます。身振り手振りで、仲間のボランティアの方に手を借りながら、楽しく活動することができました。このような活動しながら、生活に必要なドイツ語を学んでいきました。

### 3. 食品を渡すまでの一連の流れ

ボランティアの人数は、7～8人ぐらいで、10人を超えることはありませんでした。暗黙に、それぞれの持ち場が決まっています。仲良くボランティア活動を行うことができました。

#### ① 窓口の担当

「Tafel」利用のカードを見せてもらい、「何人家族であるかを聞く」



#### ② 「食料品渡し」

後ろで待機しているボランティアが、「野菜類」「パン類」「肉魚類」（冷蔵庫に入っている）をカゴに入れて渡す。



#### ③ カゴを受け取る

利用者は、各自が持って来た袋やカートに渡された食品類を入れる。空になったカゴを受け取る。

月曜日 12:00 頃～15:00 頃まで食品類を積んだトラックから、積み荷を降ろして、種類ごとに分類する仕事が重労働です。3台ぐらいの車が食品を運んできます。次の車が到着す

る合間に、食品の大まかな分類を行います。

袋に入った野菜類の一部が腐っていたり傷んでいたりするものもあります。夏場、野菜が腐って、ドロドロになって悪臭を放っているものもありました。「食品ロス」を減らすことが目的の一つでもあります。食品を提供する側の店のモラルを疑いたくなるものもありました。店が、食品を廃棄する手間を「Tafel」を利用して省いていると疑われるようなことになってほしくないものです。逆に、このままでも店頭で販売できそうなものも多数ありました。

私は、このボランティア活動を通して、ドイツ社会の食品ロスの現実を垣間見たような気持ちになりました。



#### 4. 責任者の方へのインタビュー

私は、ボランティア活動を通して、ある程度の人間関係ができてから代表の方にインタビューをお願いしたので、素朴な質問にも快く答えてくださいました。なお、インタビューに際しては、本校のドイツ語科のS先生が通訳として同席してくださったので、大変助かりました。

Q 1 「ここの『Tafel』の運営母体は、どこですか」

A 1 「隣のキリスト教の教会付属施設を借用しています」

Q 2 「ここの『Tafel』は、いつ頃から始まりましたか」

A 2 「1990年代に、イタリアからの移民が多くなったときから始まりました」

Q 3 「Barbara様は、どういうきっかけでこのボランティア活動を始められましたか」

A 3 「自分が年金生活者になるとき、お世話になった地域に恩返しができるか考えていたときに、この『Tafel』の仕事を知りました。約2年前です」

Q 4 「このボランティア活動をされていて、うれしかったことはありますか」

A 4 「支援者の方から、お礼を言われるときです。子どもから絵をもらったときです」

Q 5 「反対に困ったことは、ありませんか」

A 5 「必要としている食品を渡したとき、他の人と比べて、『どうして、私には卵をくれないの?』と苦情を言われたことです。なかなか、みなさん方の要求に平等にこたえることができないときに、悩みました」

Q 6 「行政からの補助金は受けていますか」

A 6 「まったくのボランティアです。ただし、2023年エネルギー価格、物価高騰を受けて、一時的にデュッセルドルフの各『Tafel』に7,000€の補助金を行政から支援されました。そのお金で、冷蔵庫を購入しました」

ここの「Tafel」では、約120家庭に食品を配布しているそうです。ボランティア登録している方が30~40人だということです。

私はイランからの移民で、ここでボランティア活動をしている方と知り合いになりま



休憩室に飾ってあったお礼の絵

した。彼にインタビューすると、「互いに助け合う気持ちでやっている」と、ごく自然に言われました。そして、仕事が終わると、当然のように労働の対価として自分が必要としている食品類を袋に入れて持って帰っていました。その光景に驚きを感じましたが、システムとして「Tafel」が機能していくためには、責任者の方も黙認されていました。

冷蔵庫も食品衛生に配慮している



休憩室にあるボランティアのシフト表



花類も手渡されている



野菜くずもリサイクルされている

環境に配慮しているドイツだけあって、「紙、段ボール」「野菜や果物のくず」がリサイクルされていました。

また、「Tafel」には、花類も集まっています。「花より団子」ではなく、利用者に花類を渡すことに心の豊かさが伝わり、感激しました。

コロナ禍、エネルギーの高騰などで離職をよぎなくされ、「Tafel」の利用者が増えているそうです。

段ボールもリサイクルされている



## 5. デュッセルドルフ市内の他の「Tafel」

私が、日本で「子ども食堂」に携わっていることを話すと、Barbara 様は大変興味をもってくださり、逆にいろいろなことを私に質問されました。Barbara 様に、デュッセルドルフ市内にもすぐに食べることができる「Tafel」はあるのか質問してみました。

基本的には、デュッセルドルフ市では、食料品の配布に必要なものは、市役所に行って証明をいただき、指定された所に行って支援を受けるそうです。調べてみると、デュッセル

ルドルフ市内だけでも、10か所以上の「Tafel」がありました。私が、ボランティア活動をしたところは、食料の材料だけを提供していましたが、他の「Tafel」では、調理された食べ物を提供しているところもありました。

以下の写真は、デュッセルドルフ市街地の中心部にある「Tafel」で、毎週土曜日に誰でも、利用することができます。テイクアウトですが、昼時には長蛇の列ができていたときがありました。

私も、2度利用させてもらいましたが、募金箱のようなものにお金を入れると食べ物を受け取ることができます。豆類や温かい野菜を煮込んだスープで、パンや水も、お菓子もいただきました。50セントと書いてありましたが、金額は利用者の善意で、入れなくてもよいようです。



すぐに食べることができる食料提供

他にも、キッチンカーのような「Tafel」を見つけました。必要な方が、自然に利用していました。

それぞれのニーズにあうように、支援活動を展開していることがわかりました。

実際に、運営母体は、キリスト教関係の運営の母体が多いようです。私がボランティアをした地区は、約150年前から鉄鋼関係の労働者が集う生活困窮者が多いところであると聞きました。当時から、生活困窮者を支援する動きがあったという長い歴史があることを知りました。日本と歴史的文化的に異なるので、単純に比較することはできませんが、「Tafel」が地域づくりに寄与していることがわかりました。

私が「Tafel」で、ボランティア活動をしていることを知ったデュッセルドルフ日本人学校の同僚も参加するようになったことはうれしいことでした。また、通訳をお願いした現地採用のドイツ語科のS先生も、「今まで『Tafel』という言葉は聞いたことがあっても、実際にどのように運営されているのか知らなかったもので、今後はドイツ文化理解の授業の中でも、取り扱うことができるように調べていきたいと思えます」と言われ、うれしく思いました。そして、私に「Tafel」に関するいろいろな資料をくださり、日本語訳までも付記していただき、有難く思いました。

帰国するまで行った「Tafel」でのボランティア活動を通して、様々な人と出会い、現地理解の一助になり感謝しています。帰国したら、「みんなの食堂」を運営し、食を通じて、人と人をつなぐボランティア活動を試みようという決意に至ったことを思い出しました。

## II 外国語教育・国際教育の実践





## 現地理解教育で学んだことを授業づくりに生かす

周南市立夜市小学校 教諭 藤本 浩行

(令和3年度派遣 ドイツ デュッセルドルフ日本人学校)

### 1. はじめに

令和5年8月11日、第15回国際理解教育研究中国ブロック大会(島根県松江市)が開催されました。大会テーマは、「多文化共生社会を生きる子どもの育成～松江で国際理解を語る～」でした。テーマ別分科会(海外子女教育)で発表の機会を得ましたので、令和3年度・4年度にシニア派遣教員として、ドイツ、デュッセルドルフ日本人学校で実践したことを発表させていただきました。

私は、長年に渡って小学3・4年生が使用する地域について学ぶ社会科副読本の編集委員の仕事に携わってきました。デュッセルドルフ日本人学校でも、『わたしたちのデュッセルドルフ』の社会科副読本が作成されていました。これは、赴任した教員にとっても現地理解する上で好評でした。

文部科学省から派遣された教員には、現地理解に関するレポートが課せられています。日本で地域教材を生かした授業づくりに取り組んできた私にとっては、興味・関心をもって楽しく取り組ませてもらうことができました。

私が、テーマ別部会で強調したかった点は、「教師自身が地域に出向き、いろいろな人と出会い、授業づくりを行うことを通して、子どもの自己肯定感を高めていった」ということでした。

海外の日本人学校に勤務してみて、子どもたちは好き好んで海外に来ている者ばかりではないことを知りました。親の都合で、仕方なく来ている子どももいます。現地の生活に馴染めず、日本にいる友達とオンラインゲームをして、寝不足で学校に来ている子どももいました。私の校務分掌は教育相談と特別支援教育でした。守秘義務があり、具体的なことには言及できませんが、今までの教職経験を活かし尽力してきました。

### 2. 現地理解教育が自己肯定感を高めることにつながる

日本で地域連携教育を担当し、コミュニティ・スクールの実践に取り組んできました。「地域は大きな学校」「学校の門を開いて」「学校で学んだことを地域で発揮しよう」などの合言葉で、子どもたちと地域の方をつなぐ教育実践を目指してきました。

「あなたは地域の行事に参加していますか」「あなたは、人の役に立っていると思いますか」という質問紙のクロス集計からわかるように、地域の行事に積極的に参加している子どもほど、自己肯定感が高いことが言われています。

このことを根拠に地域教材の授業づくりに取り組んできました。コロナ禍でもあり、例年やってきたようなことはできませんでしたが、全力で取り組んでいきました。

現地理解教育を推進する上で、不可欠なことは管理職の理解です。私は自己目標シートへの記入や面談でも、その必要性を語ってきました。事前に根回しをしたり、企画会や職員会議で提案したりして、手続きを踏んで周知徹底を図ったりしてきました。

社会科副読本に関しては、改訂の年度ではないということで、写真や資料の収集を行って改訂年度への参考資料にしてもらうようにしました。

以下、発表した私のプレゼンの中から2点を紹介させていただきます。

### 3. 道徳科「夢に向かって」 卓球の坪井選手による出前授業

私は、学生時代卓球をやっていました。社会人になっても地域の卓球同好会に所属していました。ドイツと言えば、サッカーが有名ですが、卓球も盛んなスポーツです。水谷隼選手が、中学生の頃からデュッセルドルフの卓球リーグに参加していたそうです。

新しく着任されたデュッセルドルフ日本人学校の理事長渡辺様も、社会人になっても地域のクラブで卓球を行っているそうです。また、デュッセルドルフ日本クラブ主催のソフトボール大会で、ドイツ在住で世界的な卓球メーカーのバタフライに所属されている梅村様と知り合いになることができました。梅村様は、全日本選手権を制覇され、アテネオリンピックにも出場され、以前デュッセルドルフ日本人学校でも講演をされた方です。

梅村様から全日本男子の卓球チームがドイツに遠征するので、出前授業のお話をもちかけてくださいました。諸事情のために実現しませんでした。ドイツ卓球リーグで活躍されている坪井勇磨選手を出前授業に派遣していただけることになりました。

梅村様のお話によると、海外でがんばっている子どもたちに接することにより、選手のモチベーションの高揚にもつながるそうです。

私が出前授業を進めていく流儀が7点あります。1点目は、「この人と子どもたちとを出会わせたい」という熱い思いをもつまで、事前の打ち合わせをすることです。実際に卓球の練習場に出向き坪井選手と会い、当日の打ち合わせを行いました。

2点目は、子どもたちがどんなことを学びたいのか、事前指導を行い、出前授業でお世話になる人と子どもとの接点をさぐることです。具体的には、「質問一覧」として送ることにしました。

3点目は、学校の中で周知徹底を図り、決して単独では動かないことです。

4点目は、授業に仕立てることです。今回の場合は、道徳科で「夢に向かって」というテーマで卓球の実技を交えたものでした。学習指導要領の道徳科の価値項目との関連も図りました。

5点目は、当日は、出前授業でお世話になる方に丸投げするのではなく、時間配分も含めて私が司会進行をしてコーディネートすること



坪井琢磨選手の出前授業「夢に向かって」



卓球の実技を取り入れた出前授業



学んだことを「お礼の手紙」で届ける

です。

6点目は、お礼の手紙を子どもたちに書いてもらって、届けるということです。

7点目に、起案したものや写真など記録に残します。次年度のカリキュラム立案のときに、参考にしてもらうことです。

当初は、私が担任する4年生だけで実施する予定でしたが、5年、6年生も是非とも一緒にお話を聞きたいということで、3学年合同で本校の体育館で実施しました。

以下、子どもたちのお礼の手紙からの抜粋です。

- 「坪井選手は、わたしたちに『食わず嫌いになってほしくない』という話をしてくださいました。これからもいろいろなことにチャレンジしていきたいと思います。」
- 「お話だけではなく、みんなと卓球をやってください、楽しかったです。坪井選手のスマッシュの速さに驚きました」
- 「坪井選手は、海外でプレーする中で、『がんばれ！』の応援がはげみになるということでした。ぼくたちの応援がはげみになることを知ってうれしいです。」

実際に、私も何度か日本人が出場するドイツの卓球リーグの観戦に行きましたが、「がんばれ！」と日本語で応援すると、振り向いてくれることがありました。

日本人学校では、日本では到底で出会うことができない著名人を学校に招聘することができることを聞きます。この貴重な経験を単発に終わることがないように、日々の教育活動につなげていきたいものです。

#### 4. 社会科「国際都市デュッセルドルフのよさを伝えよう」出前授業

ドイツの都市アーヘンで、「TOKYO オリンピック」馬術競技の協賛で、「東京音頭」を踊ることになりました。ここで、台湾出身でITエンジニアとして働いている莊建勳様と知り合いになりました。漫画の「NARUTO ナルト」で津軽三味線の魅力に取りつかれて、日本にも留学された方です。

「東京音頭」を踊る待ち時間に、私が声をかけたことがきっかけで、親しくしていただくことになりました。

使用している4年社会科東京書籍教科書では、「宮城県仙台市」の事例が紹介してあります。友好都市、国際交流が取り上げられていました。

私は、単元名を「国際都市デュッセルドルフのよさを伝えよう」として、地域教材の授業づくりを行いました。(10単位時間扱い)

まず、教科書で大まかな学習内容、学習方法を学んで、自分たちの住んでいる都道府県で地域の特色を生かして授業を展開していくことがポイントです。

日本にいるときには、社会科副読本の「きょう土山口」を活用しながら学習を展開していきました。日本人学校は、全国各地から集まっている子どもたちなので、そうはいきません。『わたしたちのデュッセルドルフ』の社会科副読本が効果を発揮しますので、内容



デュッセルドルフとの友好都市

の充実が不可欠です。

子どもたちが帰国して、自分の住んでいる都道府県のことを全く学習していないことには、大きな問題があります。

そこで、学級の子どもたちが帰国予定の都道府県を把握し、1学期から計画的に、NHK for School「見えるぞ！ニッポン」を全員で視聴させたことです。これは、47都道府県がそれぞれ15分間で紹介されている優れた番組です。「Aくんは〇〇県からやってきました」というように、いろいろな都道府県を学ぶことができる利点があります。他の子どもよりも、自分が住んでいた都道府県のことをよく知っているのでAくんを生かすことができ、自己肯定感の向上にもつながっていきました。

あくまでも、基盤となるのは、実際に住んでいるデュッセルドルフです。日本の都道府県とドイツの各州を同一には扱うことができませんが、ノルトライン・ヴェストファーレン州の州都でもあるデュッセルドルフについて学習する必要があります。

社会科を学ぶ合言葉として「人・コト・モノ」が言われます。人として、デュッセルドルフで知り合った台湾出身の莊建勳様を中心に授業づくりを考えました。話を持ち掛けたところ、快諾してくださいました。

調べ学習をする上で、子どもたちの興味・関心は不可欠です。

日本人学校の小学部では、教科担任制が導入されていて、私は、4年1組、2組の両方の社会科を指導していますので、どちらの学級も子どもたちの興味・関心ごとにグループを作って、調べ学習をさせていきました。

1組は、「ドイツに住む日本人」「有名な食べ物」「キルメス（移動遊園地）」「観光地 ライントワー」「サッカーチームフォルトナデュッセルドルフ」「ライン川」

2組は「日本デー」（人数が多いので、AとBの2つのグループに分けました）「デュッセルドルフの自然」「観光地」「ライントワー」「お菓子のハリボー」「名物」

3、4名の人数のグループで構成し、1分×人数を目安に発表時間を設定しました。タブレットが導入されているので、両組の発表は、相互に視聴させることにしました。

日本人学校に赴任する前は、インターネットを活用した現地と日本との交流を考えていましたが、時差の問題、個人情報観点から、簡単にはできないことがわかりました。比較的、手軽にできることは、複数の学級のある場合は、自分たちの作った作品を互いに視聴し合って学び合うことです。発表は、タブレットを活用させて動画にすれば可能になります。また、来年度の4年生に向けて、動画を残していけば、どんな学習をするのかという動機付けにもつながります。

「灯台下暗し」とはよく言ったものです。海外に住んでいて、外国旅行に目を向けていますが、実際に自分たちの住んでいるデュッセルドルフについては、あまり知らないものです。この単元の一部は、授業参観でも公開しましたが、保護者の方にも好評でした。あ



特技の三味線を披露して下さる場面

る保護者の方は、「知人がデュッセルドルフに来た時に、どんなところを案内しようかというのを親子で考える契機になりました。親子で調べています」という感想をいただきました。子どもたちも、興味・関心のあるテーマでグループ編成をしているので、楽しく生き生きと調べ学習に取り組んでいました。

自分たちの行っている学習が、いろいろな場面で役に立っているの、自己肯定感が上がっていきます。教師自身も子どもたちと一緒に、自分たちの住んでいるデュッセルドルフについて調べることができ現地理解教育の大切さを改めて感じました。

## 5. おわりに

教師自身が現地理解教育のために、積極的に地域に出て交流していく契機になったことは、デュッセルドルフ日本人学校と姉妹校であるツェツィーエン・ギムナジウムとの食を通じた交流です。毎年、両校の教職員による「一品持ち寄り」の交流会が開催されます。買って来ても、作って来てもよいそうで、ドイツの家庭料理を食べることができます。現地の方も、日本料理を楽しみにしておられるようです。

新型コロナ感染防止の一部が緩和され、このイベントが開催されることになり、食を通じた交流に関心のある私は、大変楽しみにしていました。

飲食を共にする交流は、音楽あり、余興ありで楽しいものです。この場を通して、人と出会い、いろいろな企画が生まれます。

実際に、ツェツィーエン・ギムナジウムで日本語を教えられているS先生と授業を見せ合うことになり、実現しました。

手作り料理を食べることができることは、相手を信頼しているからできることであり、「美味しい！」と笑顔で食べることによって、人間関係が良好になることは間違いありません。

子どもたちに現地理解教育の大切さを教えるためには、教師自身が積極的に現地に住んでいる方とふれあうことは言うまでもありません。私自身も、この交流会からたくさんの人との出会い、授業づくりのヒントを得ることができました。

ちなみに、ドイツの学校の保護者会ではケーキやお菓子を焼いて持ち寄って話し合うということです。また、誕生日には、本人がケーキなどを焼き、みんなに振る舞うことがドイツ流のスタイルということです。現地採用のドイツ語を教えてください先生方の手作りケーキやお菓子などを美味しくいただきました。

最後になりましたが、令和6年8月8日、9日「全国海外子女国際理解教育研究大会」を兼ねて、中国ブロック大会が鳥取県米子市で開催されることをお伝えします。



そうめん流しのパフォーマンス



寿司や焼きそばの日本食が人気でした

## 国際教室における課題と実践

山口市立平川小学校 教諭 辻本 紳一郎

(平成8年度派遣 オーストラリア パース日本人学校)

### 1. 平川小学校の国際教室

本校には、現在7か国（インドネシア・アフガニスタン・モンゴル・ラオス・フィリピン・ベトナム・アメリカ合衆国）から来た外国人児童たちが在籍しているが、入国に伴う編入学と帰国が年間を通して繰り返されている。滞在期間によって児童支援のニーズが異なるため、ここでは日本語指導に加え、児童の生活指導、また帰国後につながる学力保障が必要となっている。

児童の指導は毎週各学級から出される週の学習予定に基づいて作成する独自の学習予定表をもとに行う。朝時間は、学級担任と日課変更有無の確認をするとともに、その日のどの時間に誰がどの児童支援に入るかを調整する作業から始まる。その上で、通訳支援者の割り振りの確認、保護者からのメール連絡の確認、QRコードを通じた出欠・遅刻の確認をする。しかしながら、外国人児童たちは連絡なく欠席・遅刻することが少なくないため、家庭への連絡や必要に応じた家庭訪問も行っている。

### 2. 国際学校としての役割

外国人児童たちの文化や言語、宗教などの背景は様々で、それぞれの日本語能力や生活能力などの課題も様々である。こうしたことから、彼らの支援は多岐にわたる。しかし同時に彼らは生きた国際教育のための大切な人材である。この恵まれた環境を生かすため、本校で取り組んできたことの概要を記したい。

#### (1) 保護者を講師にした総合的な学習の時間

外国人児童の保護者たちは、児童が生まれ育った国の生活や文化を知るための情報を多くもっている。そこで、6年生の総合的な学習の時間に探究活動の一環として関わっていただくことにした。保護者たちは本校の子どもたちにとっては大切な地域人材でもある。彼らの多くは母国の紹介に意欲的であり、プレゼン力も非常に高い。何よりもこちらのニーズにきちんと応えてくれることが素晴らしかった。母国に対する愛国心の強さも感じた。

##### ①ラオスの話

ラオスから来ている児童の保護者は、ラオスの位置や人々の様子、日本人との肌の色の違い、ラオスの言葉、ラオスのお寺や観光名所、行事、ラオスの気候などについてのプレゼンをしてくれた。

ラオスがGreen Countryと呼ばれるくらい緑豊かな国であること、山口市がラオスのように緑豊かで素敵な町であることも話してくれた。また全国で同様の義務教育を受けることができるという日本の教育環境の素晴らしさについても話してくれた。

「教育が未来をつくる」という素敵なメッセージもいただいた。

「日本で驚いたことは何ですか？」という子どもの質問に対し、「独居老人が多いこと」と答えられたことが印象的であった。ラオスでは、三世代が同居する文化が定



着しているからとのことだった。

### ②モンゴルの話

ドラマ「VIVANT」のロケ地にもなったモンゴルから来た児童の保護者は、国全体の遊牧民数の多さや、首都ウランバートルは標高が1,350mで最低気温がマイナス40℃になることもある「世界で最も寒い首都」であること、ビルがあるのは、ウランバートルだけで、モンゴル人たちのほとんどは広大な草原でのゲル住まいであることなど興味深い話をしてくれた。



本校の子どもたちは、ゲル（直径4mほどの円形で、中央に柱があり、羊の皮で作ったフェルトをかぶせて作られた移動式住居）で住む家族みんなが1つのマットレスの上で寝ることや、トイレやお風呂がないことに驚いていた。

### ③インドネシアの話

インドネシアから来ている児童の保護者は、世界最大のムスリム人口を有する国家であるインドネシアが1万7千を超える島からなる国であること、300以上の異なる民族がともに暮らす民族的多様性を持つ国であることなどを話してくれた。それぞれの島の人々の習慣・伝統文化も風土も、自然環境も多種多様で、島を渡ると違う国だと思うくらいと言う。



その他に、インドネシアの文化である影絵やジャワのダンス、バチックの文化、インドネシアでは揚げナマズが人気であること、食事には右手を使う文化があり左利きの人も食事には右手を使うことなどを話してくれた。

### ④フィリピンの話

フィリピンから来ている児童の保護者からは、7,641の島々からなる島国であるフィリピンでは、北と南の島では方言が大きく異なり、双方の言葉が通じないこともあることや、国旗の意味、竹の繊維で作られる伝統的な服やアドボやシニガンなどの代表的な料理、デザートとして有名なハロハロなどの話があった。一匹の豚を丸焼きにするレチョンの写真には子どもたちも驚いていた。フィリピンで人気の遊び「パティンテロ」や「ルクソン・トニク」も実演してくれ、子どもたちは興味津々であった。



保護者からは「世界にはいろんな当たり前があることを知ってほしい。そして、世界に心を広げてほしい」という話があった。まさに国際教育の大事な視点である。

## (2) 地域の生徒をまじえた交流会

冬休みには、本校校区内にある平川中学校や西京高校の生徒も交えた交流会を開き、インドネシアから来ている他の児童の保護者に母国のプレゼンをしてもらった。

保護者は、どうして自分が山口市に来たのか、これまでの人生や山口市との出会い、日本とインドネシアとの違い、学校制度や人気のお菓子やインドネシアのコンビニの様子（動画）インドネシアにおけるマンガ文化や日本食などの日本文化の浸透度などについて話してくれた。山口市の観光アンバサダーとして活躍する保護者ならではの興味深い話であった。



こうした交流を通して、子どもたちが「人を通して」外国を理解したり、互いの違いや共通点を見つけたりすることはとても有意義なことだと考える。身近に外国から来た友達や保護者の方々が多くいるという平川小の「当たり前」が「とても恵まれた環境であること」に気づいてくれた子も多かったと思われる。また、こうした交流は、「国際学校」である平川小を核としたコミュニティスクールの新たな形や、地域の教育力を生かした教育活動の可能性の提案としても価値付けたい。

### (3) 帰国児童とのオンライン交流

年度途中に母国に帰国した児童たちと本校の子どもたちとのオンライン交流を行った。

#### ① バングラデシュ児童との交流 1

帰国した5年生児童は、首都ダッカに住み自宅マンションから交流会に参加してくれた。バングラデシュの休日は金曜日と土曜日であるため、交流会は金曜日に行った。



彼女の学校（女子校）は10階建てのビルで、ダッカに5つのキャンパスがあり、5つのキャンパス合わせて約33,000人の生徒がいるという。彼女の通う本校だけで生徒数は約7,000人。山口県内で最大規模の平川小の子どもたちもこの人数にとっても驚いていた。学校には午前中に通う生徒と午後に通う生徒がおり、彼女は午前中の生徒だと言う。

バングラデシュは安全でないため、一人で外を歩くことができないため、いつも車で登下校をしていることや、交通ルールを守らない運転手が多く、道路がとても危険であることなど、日本に住んだ経験のある彼女ならではのバングラデシュの感想を語ってくれた。

本校の子どもたちからのリクエストで、彼女の家の中を見せてもらおうと、日本から持ち帰った物があちこちに見られた。彼女が本校で使っていた筆箱や水筒に子どもたちからは「懐かしい！」という声があがった。

#### ② バングラデシュ児童との交流 2

同じく首都ダッカに住む児童との交流である。バングラデシュには日本のような公園がないため、ほとんど家の中で遊んでいることや家ではバングラデシュの本に加え、日本語の本も読んでいること、それは日本語を忘れないようにするためであることなどを話してくれた。

また、家の周りに多くの車が走っていること、さらにその車のほとんどは交通



ルールを守らないことなど、日本がいかに安全な国だったかも伝えてくれた。

彼女が好きな食べ物は、ビリヤニ（鶏肉や羊肉、様々な香辛料を使用して作られる炊き込みご飯）とボルハニ（サワーヨーグルト、塩、ミントやマスタード、香辛料で作られる飲み物）だという。異国の食べ物に子どもたちも興味津々であった。



交流会の最後には、2年5組の子どもたちが「世界がひとつになるまで」を歌い、バングラデシュ語で「ドンノバード」と言ってお別れをした。

### ③ネパール児童との交流

5年生クラスに在籍し、ネパールに帰国した児童である。彼女も他の2人の児童と同様に日本を去ることをとても寂しがり、母国に帰国した後も日本に帰りたがっていたため、今回の交流をとても楽しみにしていた。交流の開始は午前9時すぎであったが、オンラインで画面に出てきた児童の背景は真っ暗。現地時間では午前6時すぎだったからである。子どもたちは時差を実感したようだ。

ネパールの児童は、本校の子どもたちの質問に答えながら、自分が通っている学校が16年生まであってクラスの人数が37名であることや、交流当日の気温が28度であること（日本は真冬）、ネパールでのおすすめの場所がヒマラヤであること、日本から持ち帰った海苔を使って作るおむすびが大好物であることなどを話してくれた。



また、子どもたちからのリクエストに応じて家の外の様子も見せてくれた。

交流会の最後には、彼女が大好きだった日本の歌「花は咲く」をみんなで歌った。ネパール人児童が感動している様子が画面から伝わってきた。これも温かくて素敵な交流会となった。

## 3. ネットワーク構築と実践

### (1) 外国ルーツのこども支援ネットワーク会議

県内でも増加傾向にある外国にルーツのある子どもたちの支援は、様々な課題を抱えている。そして、学校教育の中だけで、外国ルーツの子どもたちを社会とつなげることや、彼らの生活支援を行うことには限界があり、子どもたちへのよりよい支援を期待し、令和4年度に発足したのがこのネットワーク会議である。

市内で最も多く外国ルーツの子どもたちが在籍する本校国際教室担当教員と市内在住の外国人支援を行っている「ひらかわ風の会」の事務局長が発起人として、市民活動団体や大学、行政を含めた関係機関にネットワーク構築を呼びかけたことによりこの会議は始まった。

現在は、約3か月に1度のペースで会議を開催し、学校現場における外国人児童教育の現状や課題を踏まえ、外国人児童教育に関わる団体等がどのような形でよりよい支援をすることができるかについて情報交換を交えて話し合っている。

様々な外国人児童教育に関わる諸団体が連携することにより、これまで様々な立場で外国ルーツの子どもたちに関わっていた参加者が外国人児童教育の実態についてより深く理解し、同じベクトルで彼らの教育支援や生活支援を行うことが可能になると考えている。

## (2) 外国ルーツの子ども支援研修会

ネットワーク会議の中で出たアイデアを基に、有志のメンバーが実行委員会となり企画した研修会である。今回の研修会は、教職員や学習ボランティアといった外国ルーツの児童生徒を支援する関係者を対象に、支援の質の向上及び支援者同士の交流を目的としたものである。研修会を通して支援者が必要な知識を得ると同時に、多様な立場の支援者とつながることで、当該児童生徒により質の高い支援を提供することができるという考えをもとに企画した。



研修会開催にあたってのシステムを整えるため、「外国ルーツの子ども支援実行委員会」を立ち上げ、「山口県新たな時代の人づくり推進ネットワーク」にも団体登録した。併せて令和5年4月1日施行の会則も作成した。

研修会は、8月22日に山口県立大学で開催した。日本語指導に関わる教員や団体、大学職員など50名以上が参加、さらに14名がオンライン参加するという研修会では、日本語指導に



における実践や課題についての報告、ムスリム児童が食べることができるお菓子探しの活動を通じた異文化理解、それぞれの立場ごとの分科交流会などが行われた。本校の外国人保護者5名と児童4名もゲストとして参加し、大変盛況に終わった。

## 4. オンライン日本語指導

県立大学の学生による外国人児童対象のオンライン指導である。本校児童2名が参加したこの学習から学んだことを以下に記したい。

### (1) 指導上の工夫

- 外国人児童の多くは視覚からの情報に頼っている。イラストや写真を活用した資料提示はこうした児童の実態に寄り添うことができる。しかし、日本語を発話させる場面でイラストなどの利用をすると、児童はほぼ日本語を頭の中で使わない。画像を提示する場面を工夫する必要がある。たとえば、「イラストを見て、それを日本語の文章にして相手に伝える」といった学習も考えられる。
- 新出言語は理解しにくいいため、言語をイメージできるイラストなどが提示されることが効果的である。
- 多くの外国人児童は、日本語が分からなくても、聞こえた音をそのまま繰り返すことが得意である。その場合、ほとんど児童は文字をイメージしていないため音と文字

を繰り返し往復させる学習が大切である。そして、例文を見せて読ませる活動から例文を見せる活動へと上手に移行していくことで学習効果を上げる。

- 指導者がゆっくり・はっきり、そして語を切って話すことで、児童は日本語をより正しく聞き取ることができる。また、児童への声かけを意識し、児童の反応を確認し、それをしっかりと価値付けながら授業を進めることも大切である。
- 指導者の問いに動作で答える場合には、指導者がモデルとなる動作を示すと理解しやすい。指導者が複数いる場合には、子どもに発話させる前にデモンストレーションで例を見せると、さらに分かりやすい。

## (2) 授業の流れについて

- 教科書がない授業では、学習に対して不安がる児童がいるため、その日の授業の目標を伝えてから授業を開始することが大切である。また、キーセンテンスを提示してから学習を始めると、授業の流れを大まかに把握でき安心して学習に取り組むことができる。
- 児童にとって身近な話題を取り上げることや、前時の学習内容（既知の学習内容）から授業がスタートすることで、これまでの学習をどれくらい理解できていたか、何ができていないかの確認ができる。また、何よりも「できること」から授業がスタートすると、その授業に対するモチベーション（できそうだ、という気持ち）も高まる。
- 授業内の話題を多く広げすぎると、学習者が目標にたどり着くことができないことが生じる。そのため、まとめの段階で学習者がこの授業で何を身につけたのかが分からなくなることがある。最後に学習者がどのような言葉を獲得できるのかをイメージしてから指導内容を組み立てるとよい。
- 教えたことと、学習者が学びたくなるような内容とのバランスをとることが大切である。

## (3) 言語理解への支援

- ロールプレイ形式は、児童が意欲的に取り組める。また、同じパターンの答え方ができる問いは分かりやすく、できることが増えるという意識にもつながる。
- 指導者の話を聞いた後で、「どんな内容だったか」の問いは難しい。一問一答にするか、少し的を絞った質問にする必要がある。外国人児童の多くは、ある程度は聞いて理解することができて理解していることを発話することへのハードルは高い。
- 学習者がしっかり発話する時間を確保すること。問いかけに答える際にも、「うん」「わからん」「だめ」だけでなく、文のかたまりとして発話する機会を与えたい。

## (4) 子どもの日本語の修整

- 学習者が発話した後、それを正しい日本語に修正して指導者が繰り返し発話し、同時に価値付けること。
- 「単語レベル」ではなく、「文レベル」で答えさせるような工夫をすること。
- 理解できない言葉が出てきたときに、児童と会話をしながら言葉の意味を一緒に考えることでより言葉の理解が深まる。
- 外国人児童は「ない」と「いない」の区別ができていないことが多い。こうした間違いは、その場で言い直しをさせることが大切である。
- 例えば児童が絵を見て「じょうぎ」と答えた場合、絵の横に「じょうぎ」と「もの

さし」を併記するなど、学習者の語彙に寄り添った支援が望まれる。

- 語順や助詞の誤りが多いので、話そうとしている内容をすぐに把握することが難しい場合がある。それを試させるような文を使って理解を図ることもできる。
- 多くの児童は単語レベルでの受け答えはある程度できるので、少し長い文を話せるようになると助詞の使い方が曖昧になっていることが分かる。
- 助詞の学習で様々なパターンを準備することで、その理解がしやすくなる。

#### (5) 日本語のインプットと指導方法の工夫

- 新たな語彙をインプットする際には、児童にとって身近で汎用性の高いものから。身の回りにあるものや、教室を飛び交う言葉などを活用すること。
- 身体の部位を教える際には、言われた部位をタッチさせるなど、動作を加えることで、よりリラックスした空気が生まれる。
- 単語ではなく、文にして発話させることへの工夫を。主語や述語、です・ますを付け加えた文で答えさせると良い。
- 語と語の間にスペースを入れて提示することは、語と語とのつながりを意識させるためには効果的である。

#### (6) 子どもの実態を知ること

- 「好きな○○」の部分膨らませると、児童が知っている語彙をチェックすることができる。
- 日本で生活する児童たちは、生活上のルールをある程度理解しているため、概念そのものを改めて教えるよりも、そこに付随する日本語をインプットする方が良い。
- 外国人児童は、物の名前は知っていても、動作を表す言葉をあまり知らない。生活場面でよく使う「混同しやすい言葉（拭く・掃くなど）」はしっかり押さえない。
- 学習者がどのレベルの日本語を理解し、どこに困難を抱えているかを実際に試すような時間をもったり、実際に学校を訪問し、学習者の日本語のスキルをつかんだりしておくが良い。
- 来日間もない外国人児童は、自分の身の回りにある物やこれまでに関わった日本語を比較的理解していても、発話をするのを非常にためらう傾向にある。こうした児童の場合、発話の機会を与え、少しずつ自信をもたせるようにしている。手っ取り早いのは、「読める文章を読ませる」こと。声に出して日本語を読むことが、自分の言葉を自分の耳で聞く機会となり、指導者が児童をほめるチャンスにもなる。
- せっかく積み上げた日本語力も、帰宅語の母語環境、本人の意欲が高くないこと、また特性上の問題等により、順調に向上することがなかなかできないことがある。こうした課題と日々向き合うのが日本語指導の実情である。

### 5. 次年度に向けて

4月に本校に入学する外国人児童は8名。他に編入学する児童も予定されており、我々は新たな課題と対面することになるだろう。毎日が国際理解。この環境をしっかりと生かし、本校ならではの国際教育の実践を積んでいきたい。

III  
帰国報告会・総会  
第 30 回山口県国際教育研究大会



## 令和5年度 役員会・帰国報告会・総会

山口市立湯田小学校で令和5年4月29日に「役員会」を、6月4日に「帰国報告会」と「総会」を行いました。

### 役員会



役員会では、令和5年度の計画やコロナ後の研究会の充実について話し合い、総会の準備をしました。

### 帰国報告会



昨年度末に、デュッセルドルフ日本人学校（ドイツ）、上海日本人学校浦東校（中国）、蘇州日本人学校（中国）に派遣されていた3名の先生方が帰国されました。

この日は、2名の先生が帰国報告をしてくださいました。

コロナ禍の赴任国の様子や日本人学校の教育活動、そして異文化での生活など貴重な経験の数々を熱く語ってくださいました。

たくさんの方に聞いてもらえるように、夏の研究大会でも発表してくださいます。



その後、総会を行いました。

今年度、夏季研究大会を、8月6日（日）に終日実施するよう計画しています。

**【日程】**

《午前》 **【第1部】** 帰国報告会

**【第2部】** JICA 中国によるワークショップ

《午後》 **【第3部】** 山口県在住外国の方とおしゃべり（ワールドカフェ）

**【第4部】** 直山木綿子氏（文科省初等中等教育局視学官）の講演

第30回 山口県国際教育研究大会  
大会テーマ 『世界とつながり、心豊かに生きる子どもの育成』  
令和5年8月6日（水） 於：山口県セミナーパーク

**会長挨拶**

30回目という大きな節目の大会となりました。コロナ禍を経験した私たちにとって、未知の世界で未知の自分を開拓する時代、何かに挑戦し人生に挑戦する時代になってきたと感じています。

本大会では、国際教育や小学校外国語教育のあり方を学びながら、国際的な視野と地球市民的な意識をもった、「世界とつながり、心豊かに生きる子どもの育成」をめざし、みなさんと一緒に研修を深めていきたいと思えます。



**【第1部】 帰国報告会 「住んでみたらこんなところだった」**

派遣国の歴史や文化、街の様子、実際に生活して感じたこと、そして、コロナ禍の学校生活について詳しく紹介してくださいました。



上海日本人学校浦東校 派遣教員

世界で唯一高等部を有する日本人学校です。

コロナ禍で、はじめの半年間は日本からオンライン授業を実施し、10月からようやく対面での授業を行うことができました。

現地校との交流などは行うことができなかったため、自身のフィールドワークを大切にして現地の文化を学び、子どもたちの学びに生かしていきました。

本屋や演奏会で見かける中国人は家族連れが多く、その場に応じた公共のマナーを教えていたのが印象的でした。

多くの日本人と出会い、多くの経験をすることができました。





蘇州日本人学校 派遣教員

中国での生活は、スマートフォンが命綱でした。物品の購入はもちろんのこと、コロナの陰性証明、PCR検査の証明など、全ての情報をスマートフォンで管理していました。

教育局からの通達は絶対で、突然知らされたり、すぐに内容が変わったりすることが何度もありました。公共交通機関では、100%といってよいほど必ずお年寄りに席を譲り、教師がとても尊敬されていました。

コロナ禍に加え、PM2.5の影響で屋外での活動がほとんどできず、学力が高いのに対し、体力向上が大きな課題でした。特別な活動ができない分、日々の授業づくりと学級づくりの大切さを感じた3年間になりました。



デュッセルドルフ日本人学校 派遣教員

再任用として赴任しました。地域を舞台にした教育活動が実践できることを、とても楽しみにしていました。

積極的に現地のいろいろな場所やイベントに出かけ、山口県との多くのつながりを知ることができました。自身の学びを子どもたちの学習に生かし、進んで授業公開をしました。

8割近くの子どもが、自分の希望で日本人学校に来ているのではないという現実を受け止め、子どもたちに寄り添う教育を大切にして実践を重ねました。

一方、周りに多くの補習校が存在していることから、日本人学校が選ばれる学校をめざす必要と責任を強く感じました。

## 【第2部】 ワークショップ 「楽しく学べる国際教育のワークショップ」

JICA中国山口デスクのコーディネートで、教室ですぐに使える国際教育について、アクティビティを体験しながら学びました。



### ○ 異文化体験ゲーム「バーンガ」※動物版

15枚のカードを、封筒に入れられた指示通りに協力して並び替えました。ただし、話したり書いたりして伝えてはいけません。2回目は、グループで指示が変わり、3回目は、異なる指示を受けた他のグループのメンバーが入って、カードの並び替えに挑戦しました。ゲームを通して感じる疎外感から、異文化で過ごしている気持ちに共感しました。



### ① 考えてみよう！ヨルダンの「何でだろう？」

ヨルダンの小学校で活動しているJICA海外協力隊が撮った写真を見て、「どうしてそのような行動をとるのか、どうしてそのような状況になっているのか」について、グループで話し合いました。



### ② イスラム教徒の生活を学ぼう！

イスラム教徒の生活を、クイズを通して考えました。

## 【第3部】 ワールドカフェ 「世界の話から国際教育について考えよう」

山口市在住の26名の外国人をゲストに迎え、グループに分かれて話を聞きました。今年は家族で参加して下さったゲストもあり、子どもたちも母国の文化を紹介してくれました。英語でやりとりしているグループもあり、とても盛り上がっていました。今年も、ちょっとした世界旅行気分を味わうことができました。

〔ゲスト〕 山口市国際交流員、山口市ALT、山口大学留学生





**【第4部】 講演会 「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」**

文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 様

全国学力学習状況調査や英語教育実施調査の結果を受け、今年も「言語活動を通じた」指導の重要性についてご指導いただきました。

言語を理解したり表現したりするための練習を必要に応じて行いながら、単元の1時間目からしっかりと言語活動を行っていくことの必要性や指導のあり方を、実際の授業から紹介してくださいました。その中で文構造を身につけることができるよう、子ども自身が伝えたい表現を考え、必ず口答で文発話させることが大切であることをあつくご指導いただきました。



## 「楽しく学べる国際教育のワークショップ」

山口県JICAデスク 小川 真奈

周防大島町立東和小学校 山本 直

1. 日 時 令和5年8月6日（日）11:00～12:00
2. 場 所 山口県セミナーパーク（山口市）
3. 参加人数 40人（教員（小中学校教員、大学生、スタッフ等）
4. 内 容

(1) 「バーンガ」を体験してみよう



ゲームの説明



実際の体験



熱心な取組



ふり返り

「今回は言葉や文字というツールを使えない状況で、異なるルールのもとゲームをしてもらいました。実は、このゲームの目的は、ルールの違いを文化の違いに例えた“異文化と出会った時”や“異文化の中でのコミュニケーション”を疑似体験していただくことだったので。」「世界の文化は本当に多様で、日本の常識が非常識だったり、価値観が異なったり、そして言語のコミュニケーションがうまくできない中で意思疎通していかなければならないこともあります。海外へ行かなくても、普段自分が“あたりまえ”と思っていることが“あたりまえじゃない”人に出会うことはありますよね。そんな時、戸惑うこともあるし、理解できず、または理解されずに苦しむこともあるかもしれません。」

「今回のゲームで、自分自身や自分以外の人を感じた気持ちを大切にしていれば、異文化間でも相手の気持ちを大切にされたコミュニケーションができるのではないかと思います。」

(2) 考えてみよう「ヨルダンのなんでだろう？」

**ワーク1：考えてみよう！ヨルダンの「何でだろう？」**

ヨルダンで、JICA 海外協力隊として、小学校で活動している岡崎さんが撮った写真を見せてくれました。写真とその説明を読んで、「どうしてそのような行動をするのか、どうしてそのような状況になっているのか」、グループで話し合しましょう！

**①朝食を学校で食べる！**



---

---

---

**②空き地にパンが並ぶ！**



---

---

---

**③羊に赤い番号が！**



---

---

---

**④午後 6 時～8 時は閉店！**



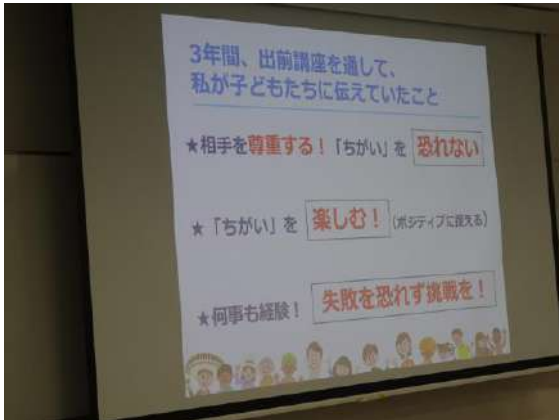
---

---

---



感想を全体で共有



【小川さんの話から】  
「人とちがっていい」  
「失敗しても学びがある」  
「チャレンジしてほしい」  
「ちがいをおそれず楽しもう」  
「ポレポレ」  
「自分でゆっくり考えて答えを出してほしい」

## 5. 参加者の感想

「ちがいを」について考える良いきっかけになりました。人権教育の日の授業で取り組んでみたいです。ありがとうございました。
国際教育に必要な意識について、ゲームや話し合いを通して実感することができました。
ルールの違いという異文化体験をゲームを通してしっかりと感じることもできました。
異文化体験をワークショップで体験できることを改めて実感し、実践したいと思いました。
実際にグループで体験し、異文化理解の難しさに気付いた。
相手に言いたいことを言葉で伝えることができないもどかしさを感じたアクティビティでした。言語の壁があるときはこんな感じなんだと共感できました。
JICAの活動については、知り合いにも応募した人もいて、大変頭が下がります。
国際理解の視野の幅を広げて頂いた。
異文化の中に突然放り出された気持ちが疑似体験できました。勤務先の外国籍の児童たちもこんな気持ちだろうと思いました。

## 6. その他

- 「ちがいを」について考えるには、今回のような「アクティビティ」が有効な手段であると考えられる。学校生活や日常生活で経験するであろう「ちがいを」に柔軟に対応できる力をもつ児童生徒を育てていきたいと感じた。
- 「多文化共生」に関するアクティビティや実践は数多くある。今後も情報交換を進めながら進めていくことが大切だと感じた。

令和5年度 研究紀要(第19集)  
『世界とつながり、心豊かに生きる子どもの育成』

発行 山口県国際教育研究会

Home Page: <http://y-geso.chu.jp/wp2018/>

発行日 2024年3月31日